# 『三玉挑事抄』注釈　雑部（一）

岩坪　健

本稿は『三玉挑事抄』雑部の巻頭歌488番から578番までを掲載する。担当者はすべて本学博士課程前期課程在学者で、以下の通りである。なお各項目末尾の（　）内には、担当者の氏名を示した。

壁谷祐亮、藤原崇雅、倉島実里、山内彩香、玉越雄介、増井里美、永田あや、太井裕子、梅田昌孝

凡例

一、翻刻は原文のままを原則として、誤字・脱字・濁点・当て字・仮名遣い等も底本の通りにしたが、読解や印刷の便宜を考慮して次の操作を行った。

1　句読点を付け、会話文などは「　」で括り、底本の旧漢字・異体字・略体は通常の字体に改めた。

2　誤写かと思われる箇所には、右側行間に（ママ）と記した。

3　和歌の上に、通し番号（488～578）を付けた。

一、［出典］の欄には、和歌と注釈本文の典拠を示す。和歌には『新編国歌大観』の歌番号を記すが、無い場合は

「該当歌なし」と表記し、『三玉和歌集類題』にあれば部立などを示す。注釈本文が『新編日本古典文学全集』（小学館。略称『新編全集』）、または『新釈漢文大系』（明治書院）に収められている場合は、そのページ数も記載する。

一、［異同］の欄には、翻刻本文との異同を列挙する。ただし、濁点や送り仮名の有無、漢字と仮名の相違は取りあげない。和歌の本文は『新編国歌大観』と、注釈本文は原則として版本と、それぞれ比較する。異同がない場合は「ナシ」と記し、ある場合は『三玉挑事抄』の本文―異文の順に列挙する。複数の作品すべてに異同がない場合は、書名をまとめて列挙して、末尾に「ナシ」と記す。

○源氏物語は、絵入り承応版本（略称『承応』。国文学研究資料館のホームページに公開）と、北村季吟『源氏物語湖月抄』（略称『湖月抄』。『北村季吟古註釈集成』新典社を使用）による。

○伊勢物語・大和物語・枕草子・古今集序・八代集・和漢朗詠集は、『北村季吟古註釈集成』（新典社）による。

○竹取物語は絵入り版本（無刊記版。同志社大学所蔵）による。

○うつほ物語は文化三年（一八〇六年）補刻本、狭衣物語は承応三年（一六五四年）版本により、いずれも三谷栄一『平安朝物語板本叢書』有精堂を使用する。

○漢籍も同志社大学に版本がある場合は、それを用いる。ない場合は『新釈漢文大系』などによる。

一、［訳］の欄には翻刻本文の現代語訳、［考察］の欄には和歌と典拠との関係など、［参考］の欄には参考資料などを記す。

雑部

天

488 あふきてもみすやすめるを空として月日もおなし光有世を

神代巻曰、古へ天—地未レ剖、陰陽不分、渾沌如二鶏ノ子一、溟涬而含レ牙ヲ。及二其ノ清陽者、薄靡而為レ天ト、重—濁者、淹二滞テ而為レ地一云云。

［出典］雪玉集、二一八〇番。日本書紀、巻第一、神代上、一九頁。［異同］『新編国歌大観』『日本書紀』ナシ。

［訳］　天

天を仰いでも分からないが、澄んでいる水を空と見なせば月も太陽も同じように光輝く世界であることよ。

神代の巻によると、昔、天と地が分かれず、陰と陽の気も分かれずに渾沌としている有様は、まるで鶏卵のようであり、ほの暗くおぼろげでありながらも、物事が生れようとする兆しを含んでいた。その澄んで明るい気が薄くたなびいて天となり、重く濁った気が停滞して地となるときに及んで云々。

［考察］「みす」は「水」と「見ず」の掛詞か。当歌は、澄み渡った水を天と地の中間にあたる空に見立て、そこに映る「陰」の月も「陽」の太陽も、天地開闢期の混沌とした中にあっては等しいと詠ったもの。

［参考］「清陽者、薄靡而為レ天、重濁者、凝滞而為レ地。」（『淮南子』天文訓）。「及二其分離一、清者為レ天、濁者為レ地。」（『論衡』）

（倉島実里）

489 春過てかへるや鳥の道はあれと古巣とみゆる雲も残らす

朗詠集。花落随風鳥入雲。

［出典］雪玉集、二一八一番。和漢朗詠集、上、春、三月尽、五五番。［異同］『新編国歌大観』『和漢朗詠集』ナシ。

［訳］　春が過ぎ、帰ってゆく鳥の通った道はあるものの、その古巣と思われる雲さえも残ってはいない。

和漢朗詠集。花は風のまにまに落ちて、鳥は雲の彼方に消える。

［考察］当歌は、飛び去って行く渡り鳥に、過ぎゆく春をなぞらえたもの。鳥が「雲に入る」とする『和漢朗詠集』の句を受け、その「雲」さえも残ってはいないと表現したところに、強い惜春の思いが込められている。

（倉島実里）

星

490時ならぬ雨風もなし久堅のほしの位のみちさたかにて

書経洪範曰、庶民惟星。々ニ有レ好レ風ヲ。星ニ有レ好レ雨ヲ。日月ノ之行、則有レ冬有レ夏。月ノ之従レ星ニ、則以風雨セリ。註ニ曰、好レ風ヲ者ハ箕星。好レ雨ヲ者ハ畢星。漢志ニ云、軫星モ亦好レ雨。意フニ者、星宿皆有レ所レ好也。

［出典］雪玉集、四三二五番。書経、周書、洪範、一五四頁。［異同］『新編国歌大観』『新釈漢文大系』ナシ。

［訳］　星

季節外れの雨風もない。庶民も、また公卿や殿上人の地位も安定していて（平安な治世であることよ）。

書経の洪範によると、庶民はその数、限りないこと星のようである。星には風を好むもの、雨を好むものがある。（それに対し、）公卿や官吏は日月であり、日月の運行は不変である。冬が来、また夏が来る。ただ月が箕星の位置にゆくと風が吹き、畢星の位置にゆくと雨が降る。これは月である公卿・官吏が、星である民の意向

に従うしるしである。註によると、風を好む星を箕星、雨を好む星を畢星という。漢志によると、軫星もまた雨を好む。思うに、星座は全て好むところがあるのだ。

［考察］『書経』洪範は、日月の運行と王の治世が重ね合わされた場面。当歌はその運行が確かであることを詠んだもの。なお「星の位」は公卿と殿上人を指す。

［参考］『書経』の解釈は注釈書によって異なり、野村茂夫『中国古典新書』一五六頁（明徳出版社、一九七四年）による。

（藤原崇雅）

491 柏　　雲

ちりひちの山より出て一すちの雲の行ゑや空にみつらん

古今序、たかき山も、ふもとのちりひちよりなりて、あま雲たなひくまておひのほれることくに。

［出典］柏玉集、一五八五番。古今集、仮名序、一九頁。［異同］『新編国歌大観』『古今集』ナシ。

［訳］　雲

塵芥（ちりあくた）の山から一筋の雲が湧き出て、大空を満たすであろうように、取るに足りない状況からの出発であっても、その道ひとすじに励めば究めるであろう。

古今集の仮名序に、高山も麓の塵や泥土の集積から出来上がり、空の雲がたなびく高さまで成長するように。

［考察］『古今集』仮名序で、和歌は天上界では下照姫、下界では素戔嗚尊が詠み初めて以来、長い年月を経て発達を遂げたと説く箇所。当歌は、身近な出発点から一途に努力を重ねることで、遠大な目標に到達することができるだ

ろうと詠んだもの。

（太井裕子）

薄暮雲

492その山と契りてかへる雲ならはおもはぬかたの風やうからん

［出典］雪玉集、二二〇〇番。［異同］『新編国歌大観』ナシ。

［訳］　薄暮の雲

その山（私）と契りを交わし、帰ると約束して戻ってくるような雲（男）であるならば、思いがけない方向から吹いてきて山（私）のもとに戻るのを阻む風（自分以外の女性）を恨めしく思うでしょうか。

［考察］当歌は、薄暮時になると雲は山へ帰り岩穴で眠る、という言い伝え（493番歌、参照）をもとにして、山を女性、雲を自分のもとに帰って来ない男性、風を別の女性に譬えて擬人化したもの。

（増井里美）

澗戸雲鎖

493くれぬとてかへる雲をやぬしならんおほふとみるも谷の扉に

醉翁亭記。雲帰而岩穴瞑シ。

［出典］柏玉集、一六六〇番。醉翁亭記、一六五頁。

［異同］『新編国歌大観』「ぬし―わく」。『新釈漢文大系　古文真宝後集』ナシ。

［訳］　谷間の家を雲が鎖す

日が暮れたといって山（別の女性）へ帰る雲を、夫とみるのでしょうか。雲は谷間の家を覆うと思っていたのですが。

酔翁亭記。雲が帰って岩穴が暗くなる。

［考察］『酔翁亭記』には、黒い雲が夕方、山に帰って岩穴に入りこむから暗くなるとある。当歌は雲を男性、「澗戸」（谷川のほとりの家）を女性、山を別の女性に見立てた。

（増井里美）

地儀

494柏 涼しさは波の花もやかほるらし南の風にむかふうなはら

南風歌、見夏部巻頭。

［出典］柏玉集、五九四番。［異同］『新編国歌大観』「かほるらし―かをるらん」「うなはら―うみつら」。

［訳］　地儀

芳しい南風が吹くと、海原で砕け散る白い波飛沫が、まるで波の花が開いて（そこから本物の花から良い香りが）匂ってくるように、私に心地よい涼しさを感じさせるのだろうか。

南風の歌は、夏部の巻頭に見える。（93番歌、参照）

［考察］当歌は海辺に立って南からの風が運んでくる香りに涼しさを感じる情景を歌ったもの。『礼記』楽記第十九には「昔者舜作二五絃之琴一、以歌二南風一」とあり、南風歌は舜によって作られたとされる。また、『孔子家語』『尸子』には「南風の薫ぜる、以て吾民の慍（いきどお）りを解くべし」とあり、南風は心を穏やかにしてくれるものとして描かれ

ている。ちなみに『宇津保物語』俊蔭の巻には、南風と名付けられた秘琴がある。

［参考］首夏　93南よりかほり来にけり花さそふ風のやとりやそなた成らん　南風歌、南風之薫兮可三以解二吾カ民ノ慍一ヲ。

（玉越雄介）

495同　山

いくくすり空にもとめし煙より蓬かしまもふしのしは山

義楚六帖二十一曰、日本国名二倭一国一在二東一海ノ中一ニ。秦ノ時、徐福将三五百ノ童一男、五一百ノ童女一ヲ止二此ノ国一ニ。東北千一余ノ里ニ有レ山。名二富士山一亦名二蓬莱一。其ノ山峻ナリ。三一面ハ是レ海。一一朶上リ聳ユ。頂ニ有二火煙一。日一中ニ上ヨリ有二諸一宝一流レ下ル。夜ハ即チ却テ上ル。常ニ聞三音一楽ヲ。徐一福止レ此ニ謂二蓬莱一至レ今。子孫皆曰二秦氏一云云。

［出典］柏玉集、一六九三番。義楚六帖、巻二十一、国。

［異同］『新編国歌大観』「空にもとめし―空につたへし」。『義楚六帖』「日本国―日本国亦」「在―ナシ」「此国―此国也」「富士山―富士」。

［訳］　山

始皇帝の命を受けて、徐福は不死の薬を空の彼方に探し求めたが、その薬をかぐや姫から送られた帝は、蓬が島（蓬莱）の不死ならぬ、柴が生い茂っている富士の山の頂で燃やして、その煙が立ち上っていることよ。

『義楚六帖』巻二十一によると、日本国は倭国と名付けられ、大陸の東側の海に位置している。秦の時代に徐福が男の子と女の子を五百人ずつ連れて、この国に渡った。この国を東北へ千里ほど進むと山があり、その山を富士山と名付けた。また、蓬莱とも名付ける。その山は険しく、山の三方は海に面しており、一方は高く聳

えている。（山の）頂上には火と煙が立ち上っている。日中は山の上より様々な宝が流れ下りてきて、夜になると上の方へと戻って行く。（この山は）常に音楽が聞こえてくる。徐福はこの地に留まり、この地を蓬莱と言って今に至っている。彼の子孫達は皆、秦氏と名乗った云々。

［考察］『義楚六帖』は徐福が日本に渡り、そこを蓬莱と名付けた場面であり、富士山の由来について述べた箇所である。当歌は富士山の頂で、薬を燃やした煙が立ち上っている有様を歌ったもの。当歌の背景には『竹取物語』が踏まえられていると考えられる。また結句の「ふしのしは山」は、『万葉集』にのみ見られる表現で、富士山の雑木林を指す。

［参考］「天の原富士の柴山木の暗の時ゆつりなば逢はずかもあらむ」（『万葉集』巻一四、三三五五番、東歌）

（玉越雄介）

496 つくは山ふりぬる跡を尋ねしもわすれかたみのみことのりかな

一条禅閤竹林抄序云、近き世に何かしのおとゝの菟玖波集をえらはれて、おほやけことになすらふるみことのりをくたされしによりて、勅撰の和歌にかたをならへ、あめかしたのもてあそひ物となれりけり云々。

［出典］雪玉集、二九三五番。竹林抄、四頁。［異同］『新編国歌大観』『新日本古典文学大系　竹林抄』ナシ。

［訳］　筑波山に雪が降った跡を探し尋ねるように、菟玖波集に古き時代の跡を求めるにつけても、帝の詔はかつて連歌が天下に認められた世を記念する、忘れ形見であることよ。

一条禅閤兼良の『竹林抄』序云、近頃の世ではなにがしの大臣（二条良基）が『菟玖波集』を撰集なさって、（帝が『菟玖波集』に）公式のしきたりに倣った詔勅をお下しになったことによって、（連歌が）勅撰集の和歌

に肩を並べ、日本国中の心の慰みものとなった云々。

［考察］典拠は宗祇編『竹林抄』序。その筆者は一条兼良で、初の準勅撰連歌集である『菟玖波集』の後に続くことを志した心情を表す。その連歌選集『新玉集』は、応仁の乱で散佚。当歌は連歌集が初めて詔勅によって認められ、勅撰の和歌集と同等の地位を得られたかつての名誉を慕う思い を詠む。第二句の「ふり」は「（雪が）降り」と「（年月が）旧り」の掛詞。

（永田あや）

名所山

497なへて世の塵よりなれるたくひかは国のはしめのあはち嶋山

神代巻。一書曰、先ッ生二淡路洲一ヲ。次ニ大日本豊秋津洲。次ニ伊予ノ二名ノ洲。次ニ隠岐ノ洲。次ニ佐渡ノ洲。次ニ筑紫ノ洲。次ニ壹岐ノ洲。次ニ対馬ノ洲。

［出典］雪玉集、二七三四番。日本書紀、巻第一、神代上、三四頁。

［異同］『新編国歌大観』「なへて―なれて」。『日本書紀』「隠岐―億岐」。

［訳］　名所の山

すべてこの世は取るに足りない塵によってできているようなものなのだろうか。いや、そんなことはありはしない。国の始め、伊弉諾尊・伊弉冉尊の国生みで、淡路島が最初に生み出されたようにして、この世は出来ているのだ。

神代巻の一書に伝えていう。まず淡路島を生んだ。次に本州。次に四国。次に隠岐。次に佐渡。次に九州。次

に壱岐。次に対馬。

［考察］『日本書紀』神代巻の、伊弉諾尊・伊弉冉尊による国生み神話。淡路島を最初に生み、そののち 残りの大八洲を生んでいったことが語られる箇所である。当歌は、国生み神話で、淡路島が最初に生み出されたことを踏まえ、この世の成り立ちが塵の集まりなどではなく、国生みで生まれた淡路島が最初である、と詠む。

（梅田昌孝）

富士

498 ふしのねはおほかたにやは人のみん此世のうちのそめ色の山

法華経薬王品。衆山之中須弥山為第一。

［出典］雪玉集、五二一七番。［異同］『新編国歌大観』『妙法蓮華経』ナシ。

［訳］ 富士

富士山を、なみひととおりではなく人々は見るだろう。法華経にいう衆弥山のような、人々の心を惹きつけてやまないこの世で一番の山なのだから。

妙法蓮華経薬王菩薩品。諸山の中で衆弥山が第一である。

［考察］仏教の世界説で、衆弥山のことを、蘇迷盧（そめいろ）の山という。当歌は『妙法蓮華経』において、衆弥山が諸山のうちで第一とされていることを踏まえ、日本第一の山である富士山を詠んだ歌である。

（梅田昌孝）

河

499行ものはかくこそ有けれとおもふにも川瀬の水そ袖の上なる

論語。子在二川ノ上一曰、逝ク者ハ如レ斯夫。不レ捨二昼一夜ヲ一。

［出典］雪玉集、四〇三六・八一〇一番（重複歌）。論語、子罕篇、二〇四頁。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『論語』「捨―舎」。

［訳］　河

年月が過ぎ去っていくのは川の水の流れのように避けられないものだなあと思うと、川の水（涙）は空しく老いてゆく私の袖の上にあるのだなあ。

論語。孔子が、ある時、川のほとりに居て、流れてやまない川の水をながめて詠嘆していうには、過ぎ去って帰らぬものは、すべてこの川の水のようであろうか。昼となく夜となく、一刻も止むことなく、過ぎ去っていく。人間万事、この川の水のように、過ぎ去り、うつろっていくのだろう。

［考察］『論語』子罕篇、「川上の嘆」として有名な章。古注では詠嘆の悲観、新注（朱子などの説）では人の進歩についての希望と解釈が異なるが、当歌の下の句「川瀬の水そ袖の上なる」により古注に従う。当歌は、孔子が川の水の不断の流れの如く、空しく老いてゆく我が身を詠嘆した場面に寄せて詠んだもの。

（山内彩香）

500言に出ていはぬ色かは川水のときに一たひすむもありけり

王子年拾遺記。丹―丘千年ニ一タビ焼、黄―河千―年ニ一清ム。皆至聖之君以為二大―瑞ト一。

［出典］雪玉集、二六三九番。拾遺記、巻一、高辛。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『拾遺記』（『漢魏叢書32』）「皆―ナシ」。

［訳］　言葉で言い表せない気持ちがあるだろうか。黄河の水が千年に一度澄むこともあるのだからなあ。王子年拾遺記。仙人の住むという丹丘は千年に一度焼け、黄河は千年に一度清むという。これらはみな、堯や舜のような優れた天子が非常にめでたいしるしとした。

［考察］『拾遺記』は、四世紀に活躍した王嘉が、伏羲から晋代に至る説話を編集したもの。丹丘では鬼の血が固まってできる瑪瑙がよくとれ、その瑪瑙で甕を作ると良い政治の瑞祥である甘露が満ちるという。当歌は黄河でさえ清むことがあるのだから、自らの心も口に出して晴れないことはないと詠んだもの。

（山内彩香）

501いかはかり心のきよきみわ川や涼しきまゝの名をとゝむらん

万葉集、十、詠河歌、作者未詳。ゆふさらすかはつなく也みわ川の清き瀬の音をきくはしよしも

［出典］雪玉集、二二三四番。万葉集、巻三、二二二三番。

［異同］『新編国歌大観』『万葉集』（西本願寺本の訓）ナシ。現代の訓は結句が「聞かくし良しも」。

［訳］　清い流れの三輪川のような、邪念のない潔白なわが身も、どれほど潔い名声を残しているだろうか。万葉集巻十、河を詠む歌、作者未詳。夕ごとに蛙が鳴いているようだ。三輪川の清い瀬音を聞くのはよいものだなあ。

［考察］当歌は昔から清い流れである三輪川になぞらえて、わが身も同じように潔白なままであるかと詠んだ歌。「みわ川」の「み」に「身」を掛ける。

（壁谷祐亮）

502 柏　　野

とをつ人とふひ絶ぬる春日野や道ある世をは空にしるらん

続日本紀、見于春部。

［出典］雪玉集、三七四二番。続日本紀、元明天皇、和銅五年正月。

［異同］『新編国歌大観』『補訂国史大系二　続日本紀』ナシ。

［訳］　野

狼煙も訪れる人も絶えてしまった春日野であるが、正しい政治が行われ平和な世の中を、昔の人は空を見て分かるだろうか。

続日本紀の春の部に見える。（77番歌、参照）

［考察］当歌は、昔、春日野では狼煙を上げていたが、遷都により平城京は廃れ訪れる人もいない今、狼煙を上げる必要もなくなった平和な世を、昔の人は空を見て分かるだろうかと詠んだもの。「とふひ」に「飛火」「訪ふ日」を掛ける。

［参考］春野　77名のみしてとふ火も見えす春日野や風しつか成御代の春哉　続日本紀曰、元明天皇、和銅五年正月廃シテ河内国高安ノ烽ヲ始テ置テ高見烽及大和国春日ノ烽ヲ以テ通ス平城一也。史記、周本紀曰、幽王為ニ燧燧大鼓ヲ有ニ寇至一則挙ニ烽火一ヲ諸侯悉ク至ル云云。正義曰、昼日ニハ燃レ烽以望ニ火烟一夜ハ挙テ燧ヲ以テ望ニ火光一也。

（壁谷祐亮）

野風

503打むれてゆけは北野の春の風おもふかたとや駒いはふらん

文選、古詩。胡馬依北風。註翰曰、胡馬出於北依望北風思旧国。

［出典］雪玉集、二二二四番。文選、巻二九。［異同］『新編国歌大観』『和刻本文選』ナシ。

［訳］　野風

寄り集まって北野へ行くと春風が吹いている。馬はこの風が恋しい方角から吹くと思って、喜んでいるのであろうか。

『文選』古詩。北方胡地の馬は北風に身を寄せる。翰の注によると、胡馬は北方で生まれ、北風が吹くと故郷を思う、とある。

［考察］当歌は北野に春風が吹き、北から吹くと思ってか馬が喜んでいるという歌。『文選』は古詩十九首中の第一首で、遠行の夫を思う妻の詩。「北野」に「北」を掛ける。

（壁谷祐亮）

谷風

504たかためとあした夕に吹かへて谷のこゝろを風にみすらん

氏族排韻曰、鄭弘採薪白鶴山。得一遺箭。頃有人覓、弘与之。問弘所欲。曰、「常患若耶溪載薪為難。願且南、暮北風」。至今猶然。又見于後漢書鄭弘伝註。

［出典］雪玉集、三六三三番。氏族大全、巻一九、隔座屏風。後漢書、列伝、鄭弘伝、註。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『氏族大全』（四庫全書）「旦南暮」―「旦南風暮」。

［訳］　谷風

朝と晩で風向きをかえてまで、一体誰のために谷の心を風に託して表しているのだろうか。

氏族排韻によると、鄭弘が白鶴山で薪を採っていると、一本の遺り箭を得た。しばらくすると、人が現われ（箭を）求めたので、弘は箭を与えた。（するとその人は）弘が欲するものを尋ねたので、弘が言うことには「（私は）常に若耶渓で薪を載せることのわずらわしさを患えている。願うことには、朝には南風を、暮には北風を吹かせてください」。今もなお、その通りである。また、『後漢書』鄭弘伝の註にも見られる。

［考察］『氏族排韻』とは『排韻増広事類氏族大全』のこと。当歌は、山で出会った仙人に箭（矢）を返した報いにより、谷風の便を得て仕事を楽にしたという「鄭公風」の故事を踏まえている。朝と晩で風向きを変える谷風に、心を見出して詠んだもの。

［参考］「孔霊符会稽記曰、射的山南有白鶴山、此鶴為仙人取箭。漢太尉鄭弘、嘗采薪得一遺箭。頃有人覓、弘還之。問何所欲。弘識其神人也、曰、常患若邪渓載薪為難、願旦南風暮北風。後果然。故若邪渓風、至今猶然。呼為鄭公風也。」（『後漢書』鄭弘伝註）

（倉島実里）

関

505なにことものりをこえ行世の人のこゝろにかたき関守もかな

論語、為政篇。七―十ニシテ而従二心ノ所レ欲不レ踰レ矩ヲ。

［出典］雪玉集、二二一四番。論語、為政、第二。［異同］『新編国歌大観』『新釈漢文大系　論語』ナシ。

［訳］　関

何事に付けても矩を越えてしまうこの世の人間の心にも、しっかりとした関守がいてほしいことだ。

『論語』為政の篇。七十歳にして、心の欲するままに行動しても、道徳の規準や道理に違うことがなくなった。

［考察］『論語』の有名な一節に、人間は七十歳で道徳や理に違うことはなくなるとされているが、当歌はそのような人間が規範を逸脱してしまうことを憂えたもの。自制を促す心の番人を望む作者の思いが込められている。

（倉島実里）

506 みやこにと出たつ袖のにしきにもめとまるけふの関むかへ哉

関屋巻云、袖口、物の色あひなとも、もり出て見えたる、ゐなかひすよしありて云々。かのむかしの小君、いまは右衛門のすけなるをめしよせて、「けふの御関むかへは、え思ひすてたまはし」なとのたまふ。

［出典］雪玉集、二九三八番。源氏物語、関屋巻、三六〇頁。［異同］『新編国歌大観』『承応』『湖月抄』ナシ。

［訳］　都へ向かってきた車からこぼれる袖の色合いにも目がとまる、今日の関迎えであることよ。

関屋の巻によると、車の下簾から袖口や襲の色合いなどもこぼれ出て見えるが、その有様は田舎びず風情があって云々。あの昔の小君、今は右衛門佐になっているのを（源氏は）お呼び寄せになって、「今日わたしが関までお迎えに出たことを、いいかげんにはお思い捨てにはなれまい」などと伝言なさる。

［考察］関屋の巻は、夫の伊予介と任国から帰京する空蝉と、石山寺へ参詣する源氏が、偶然に出会う場面。当歌は、源氏の視線から、空蝉が乗っていると思われる女車からこぼれて見える袖口の色のあざやかさを詠んだもの。

関屋　（藤原崇雅）

507あふさかの花とそみゆる関やよりこほれ出たる旅のよそひは

同巻云、霜かれの草村〳〵をかしう見えわたるに、関やより、さとはつれ出たる旅すかたともの、色〳〵のあをのつき〳〵しきぬい物、くゝり染のさまも、さるかたにおかしうみゆ。

［出典］雪玉集、二二一五番。源氏物語、関屋巻、三六〇頁。［異同］『新編国歌大観』『承応』『湖月抄』ナシ。

［訳］　関守の番小屋

逢坂の花のように見えるなあ。関所の建物からこぼれ出てきた、光源氏一行の色とりどりの装いは。

関屋の巻によると、霜枯れの草が濃く淡く一面に美しく見渡されるあたりに、関所の建物からさっと抜け出した光源氏一行の旅装束の、色とりどりの狩衣が、それぞれにふさわしい刺繍や絞り染をほどこした有様も、場所がら趣深く見える。

［考察］関屋の巻は、霜枯れの草と、光源氏一行の色とりどりの狩衣との対照を描いた場面。当歌は、美しい狩衣を花にたとえて詠んだもの。

駅　（藤原崇雅）

508袖もさそふりくる雨はしのつかのむまやの鈴のさよふかき声

杜荀鶴。駅ノ路ノ鈴ノ声ハ夜過レ山ヲ。

延喜式曰、駅鈴伝符。皆納漆〻簾子。主鈴与少納言共預奉行云云。
禁秘抄曰、件鈴。太〻有レ興物也。或六角或八角云云。

［出典］雪玉集、二六一四番。全唐詩、秋宿臨江駅。延喜式、巻一二、主鈴。禁秘抄、上、大刀契。

［異同］『新編国歌大観』『全唐詩』ナシ。『延喜式』（国史大系）「駅鈴伝符―駅鈴伝符等」「漆簾子―漆籠子」「奉行―供奉」。『禁秘抄』（群書類従）ナシ。

［訳］　駅

旅人の袖もさぞ濡れていることだろう。雨の降るなか、篠塚の駅家を夜更けに行く旅人の鈴の音が聞こえるよ。

杜荀鶴の詩。馬につけた鈴の音を響かせながら、旅人が夜に山を過ぎて遠ざかっていく。

『延喜式』によると、駅鈴や伝符はすべて漆の籠（はこ）に納め、主鈴が少納言と共に奉行に預ける。

『禁秘抄』によると、件の鈴はたいへん興味深いものである。六角のものも八角のものもある。

［考察］杜荀鶴の詩は『和漢朗詠集』（下、山水、五〇二番）、『千載佳句』（行旅）にも収められ、本文異同はない。当歌は、雨に降られながら、鈴の音を響かせて夜更けに行く旅人を気づかって詠んだもの。「ふりくる」の「ふり」は、雨が「降る」と鈴を「振る」の掛詞。「篠塚の駅家（うまや）」は三河の国にあった東海道の古駅。

［参考］『延喜式』の「漆簾子」は、国史大系『延喜式』の本文「漆籠子」により訳した。

（増井里美）

名所汀

509 あかしかた貝やひろはん月清きなきさはいせの海ならねとも

明石巻云、いせの海ならねと、「清きなきさに貝やひろはむ」なと、声よき人にうたはせて。

［出典］雪玉集、二三九六番。源氏物語、明石巻、二四三頁。［異同］『新編国歌大観』『承応』『湖月抄』ナシ。

［訳］　名所の汀

明石潟で貝を拾おう。この月の清らかな渚は、伊勢の海ではないけれど。

［考察］当歌は、明石で光源氏たちが演奏しながら催馬楽「伊勢の海」を謡っている場面を踏まえたもの。明石の巻によると、ここは伊勢の海ではないけれども、「清き渚に貝や拾はむ」と、声のよい人に歌わせて。

［参考］「伊勢の海の　清き渚に　潮間（しほがひ）に　なのりそや摘まむ　貝や拾はむや　玉や拾はむや」（催馬楽「伊勢海」）

（増井里美）

滝水

510朝日影にほふけふりの紫にくだけてかゝる滝のしら糸

李白、廬山瀑布詩。日照香炉生紫煙、遙看瀑布掛長川。

［出典］雪玉集、二二二七番。李白「望廬山瀑布」。［異同］『新編国歌大観』ナシ。『漢詩大系　李白』ナシ。

［訳］　滝水

朝日が輝いて紫のもやが立ち昇るなか、しぶきが砕けて掛かる滝の白糸よ。

李白「廬山の瀑布」詩。日の光は香炉峰を照らして紫の煙（もや）を生じており、その中腹に瀑布が長い川のように掛かっているのが遙かに見える。

［考察］当歌は李白の詩を踏まえて、朝靄の中に滝が流れ落ちる様を詠んだもの。

山中瀧音　（太井裕子）

511をのつから耳をそあらふ塵の世は雲井のみねの滝つしら波

高士伝曰、巣父ハ堯時ノ隠人也。堯譲許由也。由以告巣父曰云云。許由悵然トシテ不自得乃遇清冷之水洗其耳。

［出典］雪玉集、八〇五〇番。『高士伝』巻上、巣父。［異同］『新編国歌大観』『高士伝』（四庫全書）ナシ。

［訳］　山中の瀧の音

許由のように自ら耳を洗おう。塵にまみれたこの世のことは、天上の山にある滝の白波のように知らずして。

高士伝によると、巣父は堯の時代の隠人である。堯は（己の天下を）許由に譲ろうとした。許由はそのことを巣父に相談した云々。許由は悵然として自惚れることなく、清らかに澄んだ水でその耳を洗った。

［考察］当歌は「洗レ耳」の故事を踏まえて、すさんだ世を厭い、流れる水で耳を洗うことで俗世間から抜け出したいという心情を詠ったもの。「白波」に「知らず」の意を掛ける。

山中瀧水　（玉越雄介）

512あまの川せき入て雲のおとすかと水上しらぬ山のたきつせ

李白。飛流真下三千尺、疑クハ是銀河ノ落ツルカト九天ヨリ。

［出典］雪玉集、三九四〇番。李白「望廬山瀑布」。［異同］『新編国歌大観』『漢詩大系　李白』ナシ。

［訳］　山中の瀧の水

空に流れる天の川の水をせき止めて、雲の上から落としているのかと疑うほど、どこから流れてきているのか分からない、山中の滝であるなあ。

李白の詩。滝が三千尺の高さからまっすぐに下っている有様は、まるで銀河が大空から落ちているのかと疑うほどだ。

［考察］当歌は510番歌の出典に続く漢詩を踏まえて、山中の滝を廬山に流れる滝に見立てたもの。

（玉越雄介）

布引滝

513 柏　雲きりの空につゝみて白きぬのはたはりせはき布引の瀧

いせ物語の詞、秋の部に見えたり。

［出典］柏玉集、一六九七番。伊勢物語、八七段。［異同］『新編国歌大観』ナシ。

［訳］　布引の滝

雲や霧が天空を覆うように、滝の岩肌を包んで流れ落ちる布引の滝は、幅の狭い白絹がたなびいているようだ。

伊勢物語の文章は、秋の部に見える。（220番歌、参照）

［考察］『伊勢物語』八七段では布引の滝を「長さ二十丈、広さ五丈ばかりなる石のおもて、白絹に岩をつつめらむやうになむありける」として、岩を白絹でおおって包んだようだとする。当歌はその景色を踏まえて、天にたなびく白絹のような布引の滝の美しさを詠んだもの。

［参考］布引滝　220柏くれゆかはいさ此山に待出ん月のひかりも布引の滝　いせ物語。「いさ、この山のかみにありといふぬの引の瀧、見にのほらん」といひて。

（玉越雄介）

辰市

514月も日もはかなくてのみ辰の市玉にもかへむ影にやはあらぬ

淮南子曰、聖人不レ貴ヒ尺ノ之璧ヲ而重ス寸之陰ヲ。時ハ難シテ得而易ケレ失ヒ也。

［出典］雪玉集、五二二七番。淮南子、五七頁。［異同］『新編国歌大観』『新釈漢文大系　淮南子』ナシ。

［訳］　辰の市

月も日もただむなしく経つのだから、辰の市で宝玉にも取り替えられる光陰は売られていないだろうか。

淮南子によると、聖人が一尺の玉を貴ぶことなく、一寸の光陰を重んずるのは、時の得難く、また失い易いことによる。

［考察］『淮南子』の巻一「原道訓」は、時節を逃さず臨機応変に行動することで他者に先んずることを説く。辰の市は大和添上郡の大安寺にあった古代の市で、辰の日ごとに立ったといわれる。当歌は、何でも売られている辰の市ならば、宝石に値する時間も買えるだろうかと詠む。「辰」に「経つ」を掛ける。

［参考］「をしとてもよしや月日は辰の市暮行く年を春にかへてむ」（雪玉集、一七七七番）

（永田あや）

橋

515いまも世に絶たるをつく道はあれとわたすやかたきくめの岩はし

論語、堯曰篇。興二滅国、継二絶タル世ヲ一。

班固、両都賦序。興レ廃タルヲ継テ絶タルヲ潤二色ス鴻一業ヲ。

［出典］雪玉集、七四五二番。論語、堯曰、四二八頁。文選、両都賦序、一五頁。

［異同］『新編国歌大観』『新釈漢文大系　論語』『新釈漢文大系　文選　賦篇上』ナシ。

［訳］　橋

今でも世の中には廃絶してしまったものを受け継ぐ手立てはあるが、それでもなお架けるのは難しいのだろうか、久米の岩橋は。

論語、堯曰篇。滅びた国を再興してやり、絶えた家を継がせて家系を復活してやる。

班固、両都賦序。廃止されたものを再興し、中絶したものを継続し、偉大な帝業を潤色して飾る。

［考察］『論語』堯曰篇は、古代の王の伝を引きながら、国を治めるにあたり君主が為すべき帝業を論じる。『文選』「両都賦序」は、周の成王・康王以降廃れてしまった詩や音楽の文化を、漢の武帝・宣帝が制度を整え復活させたことを述べる。久米の岩橋は、役の行者が一言主神に命じて大和の久米路に架けさせようとしたものの、醜い容貌を恥じた一言主神が夜中しか働かなかったために完成しなかった橋。当歌は、中国の故事に反して、久米の岩橋が未完に終わったことを詠む。

暁鶏

（永田あや）

516そらねをも鳴てかたらへ暁の鳥をもまたぬ老のねさめを

史記。秦昭王、後悔出孟嘗君、求之、已去。使人馳伝逐之。孟嘗君至関、々法、鶏鳴而出客。孟嘗君恐追至。客之居下座者、有能為鶏鳴。而鶏尽鳴。遂発伝出。々如食頃、秦追果至関。已後孟嘗君出、乃還云云。

［出典］雪玉集、五八三〇番。史記、孟嘗君列伝第一五、二八頁。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『新釈漢文大系　史記』「使人馳伝逐之―即使人馳伝逐之」。

［訳］　暁の鶏

寝たふりをしている人も、起こして語らいなさい。鶏が鳴くのも待たない、老いの寝覚めであることよ。

史記。秦の昭王は後に孟嘗君を釈放したことを後悔し、捜させたがもう出発したあとだった。すぐさま人をやり駅伝の馬で追わせた。一方、孟嘗君の一行は関所に着いたが、関所の規則として、鶏が鳴いたら旅行者を通すのである。孟嘗君は追っ手の来るのを恐れた。客分の下座にいる者で、鶏の鳴き声を上手にまねる者がいた。その声につられて鶏がいっせいに鳴き出した。こうして伝馬を出発させ、関所から脱出した。出てから間もなく、秦の追っ手が関所にたどり着いた。だが、すでに孟嘗君の出た後だったので、空しくひき返した。

［考察］秦の昭王に捕えられた斉の孟嘗君は釈放され、逃れて夜半に函谷関に来たが、そこには鶏鳴までは開門しない掟があったので、鶏の鳴き真似の上手な食客に鳴き声を出させ、群鶏をそれに和させるようにして開門させて脱出することができた、という故事。当歌はこの故事を踏まえ、鶏が鳴く前に目覚めてしまう孤独な老人に呼びかけたもの。

（梅田昌孝）

雑歌中

517あかつきをたか訓より庭つ鳥かならす告る物と成けん

論語、李氏篇。嘗テ独リ立。鯉趨ツテ而過レ庭ヲ。曰、「学タルレ詩ヲ乎」。対テ曰、「未シ也」。「不レンハ学レ詩ヲ、無シ以テ言」。鯉退テ而学レ詩ヲ。

［出典］雪玉集、四四三九番。論語、李氏第一六、三七〇頁。［異同］『新編国歌大観』『新釈漢文大系　論語』ナシ。

［訳］　雑歌の中

庭訓の故事のように、同じ庭でも鶏は誰かの教えにより、暁を必ず告げる鳥となったのだろうか。

論語、李氏編。ある時、父（孔子）が一人で縁側に立っている時、私（伯魚、鯉）がその前を小走りして父に敬意を表しながら庭を通り過ぎると、父が呼び止めて、「鯉よ、お前は詩を学んだか」と言われたので、私は、「まだでございます」と答えた。すると父は、「詩を学ばなくては人と話ができないよ。詩は人情の発露であり、言葉が洗練されて耳ざわりのよいものだ。詩を学びなさい」と仰った。そこで私はすぐ引きさがり、詩の勉強を始めた。

［考察］『論語』李氏編第十六は、伯魚（鯉）が、庭を通り過ぎる時、父（孔子）から詩経を学ぶように教えられ、それから詩経の勉強を始めた、という庭訓の故事。当歌は、庭にて教えが行われたことを踏まえ、庭と鶏をかけて、鶏も誰かの教えによって暁を告げる鳥になったのだろうか、と推測した歌。

朝　　（梅田昌孝）

518柏 道を聞友やなからん打むれてあしたに出る人は有とも

里仁篇。子曰、朝聞レ道、夕死可矣。

［出典］柏玉集、一五八三番。論語、里仁篇、九一頁。［異同］『新編国歌大観』『新釈漢文大系　論語』ナシ。

［訳］　朝

道を聞く仲間はいないのだろうか。連れだって朝に出発する人はいるけれども（朝方に道を聞く友はいないなあ）。

論語、里仁篇。孔子が言うには、もしも朝方に我々が当然行わなくてはならぬ人たるの道を聞くことができたら、かりにその晩に死んだとしても、まず満足すべきであろう。

［考察］出典は『論語』里仁篇。孔子の最も偉大な言葉の一つに数えられる。人生の目的は道を聞いて体得、実現することであり、君子たるものは道を聞くことができれば死んでもよいという意味。

（山内彩香）

519よるきては光なしとや故郷ににしきもひるの名をとゝむらん

昼

魏志、張既伝曰、既為二雍一州一刺一史ト。太一祖謂レ既ニ曰、「還二君本一州一ニ、可レ謂二衣レ繡ヲ昼ル行ト矣」。

［出典］雪玉集、二一九六番。三国志、魏志、巻一五。［異同］『新編国歌大観』『三国志』（和刻正史本）ナシ。

［訳］　昼

夜に故郷に帰っては、錦の輝きがみえない（ように、出世しても故郷に知らせないと甲斐がない）というわけで、故郷に錦を飾り、名声を残すのだろうか。

魏志、張既伝によると、既は雍州の刺史となった。太祖（曹操）は既に「君は故郷の州に帰るが、縫いとりのある服を着て真昼に行くと言ってよいだろう」と言った。

［考察］出典は『三国志』「魏志」の張既伝。張既は名門の出ではなかったが、曹操に付き従い、人民にも慕われるようになり、刺史にまでのぼりつめた。「錦を着て昼行く」とは、成功したり出世したりした姿を郷土の人々に見せ知らせる、という意味。「錦を着て夜行く」とは、成功した姿を見せないと甲斐がない、という意味。「夜の錦」という歌語も生まれた。

（山内彩香）

竹風如雨

520くれ竹の窓うつ音はくらき雨の葉分さやけき月の下風

白氏文集。耿々タル残灯背レ壁影。蕭々タル暗雨打ツレ窓ヲ声。

［出典］雪玉集、二二七〇番。白氏文集、上陽白髪人。［異同］『新編国歌大観』『白楽天全詩集　第一巻』ナシ。

［訳］　竹風、雨の如し

呉竹が窓を打つ音は、夜の雨が窓に当たる音のようだ。その呉竹の葉のすき間から、清らかな月の光が降り注ぎ、風が吹き抜けることだ。

白氏文集。かすかで今にも消えそうな燃え残りの灯は、壁の向こう側に明るい方を向けて部屋を暗くしているので、その火影が一層頼りなく寂しげだ。もの寂しく暗夜に降りしきる雨の音が、ひとしきり激しく窓を打ってわびしい限りだ。

［考察］『白氏文集』の新楽府「上陽白髪人」は、玄宗の宮女として宮中に入ったが、楊貴妃が寵愛を受け上陽宮に退けられ数十年を孤独に過ごしてきた老女に同情を寄せた詩。

［参考］『白氏文集』の一節は、『和漢朗詠集』（秋夜、二三三番）に収録。また、雨は降っていないのに、雨音のように聞こえるという趣は、「風、枯木を吹けば晴の天の雨。月、平沙を照らせば夏の夜の霜」（『和漢朗詠集』夏夜、一五〇番）にある。

（山内彩香）

草庵雨

521糸竹の声のうちなる雨もしれ草の庵のよるのこゝろを

陸務観。遣レ檐ヲ点二滴如一琴一筑一。

白氏。廬一山ノ雨ノ夜草一庵ノ中。

［出典］雪玉集、二一八九番。錦繡段。白氏文集、巻一七、八一頁。

［異同］『新編国歌大観』『新刊錦繡段』『新釈漢文大系　白氏文集』ナシ。

［訳］　草庵の雨

楽器がほのかに鳴っているように聞こえる雨よ、どうかわかってくれ。夜、草の庵にいる私の心を。

陸務観（陸游）。檐をめぐり滴る雨だれの音は、管弦楽の演奏のようだ。

白氏（白居易）。私は廬山の雨の夜に草堂の中で、一人寂しく過ごしている。

［考察］典拠の漢詩は陸游「冬夜聴雨戯作」第一句と白居易「廬山草堂、夜雨独宿、寄二牛二・李七・庾三十二員

外」の第四句で、ともに都から離れた草庵で、独り夜を過ごしながら詠んだもの。当歌はそれらを踏まえ、草庵で夜に聞く楽器の演奏のような雨音に包まれながら、自らの境遇を詠んだもの。

［参考］陸游の詩を収めた『錦繍段』は、室町時代の文学僧であった建仁寺の天隠龍澤が、初学者のために唐宋元時代の代表的詩人の七言絶句の中から三百二十四首を選び、門別に編集して一巻とした漢詩集。万治元年（一六五八年）刊を使用。

（壁谷祐亮）

瀟湘夜雨

522竹のはの色染かへしなみたをも夜ふかき雨の枕にそしる

博物志曰、舜死、二二妃涙一下テ染レ竹ヲ成レ斑ヲ。妃死シテ為二湘神一。故ニ曰二湘一妃竹一ト。

［出典］雪玉集、六三三六番。円機活法、巻一二、斑竹。［異同］『新編国歌大観』『円機活法』ナシ。

［訳］　瀟湘の夜の雨

竹の葉を染めてしまうという涙を雨のように流していたことを、夜が更けてから枕を見て知ることだ。

博物志によると、舜が死ぬと二妃は涙を流し竹を染めて斑を作った。妃は死んで湘神となった。それで湘妃竹という。

［考察］湘妃竹という斑竹の異称ができた故事を踏まえて、当歌は湘妃の涙が竹を染めたように、自分の涙（紅涙か）も枕を染めたと詠んだもの。

［参考］『博物志』の本文は「堯ノ之二二女舜ノ之二二妃ヲ曰二湘夫人一ト舜一崩シテ二二妃啼テ以レ涕ヲ揮レ竹ニ竹尽ク班ナリ」であり、

『円機活法』所引とは異なる。

（壁谷祐亮）

523かちまくらとまもる雨やふるき世を忍ふることの音に残るらん

唐詩訓解曰、雁至二衡陽一而回ル、即瀟―湘ノ之間也。言心ハ汝何事ニシテ而即回ル。彼瀟―湘ノ之旁山―水甚タ美シ。儘可二栖―託一。所二以帰一者ハ、得レ非下湘霊以二二十五絃弾スルヲ月ニ汝不レシテ勝二其ノ悲一而飛―来上ルニ耶。按瑟―中有二帰雁操一仲文所レ賦湘―霊鼓レ瑟為二当時一所レ称セ云云。

才子伝巻四曰、起字ハ仲―文、呉―興ノ人。初従二計吏一、至二京口客舎一。月―夜閑―歩ス。聞二戸―外有二行―吟ノ声一。哦シテ曰、「曲―終人不レ見、江―上数―峯青シ」。凡再―三往―来、起遽ニ従レヘドモ之ニ、無レ所レ見矣。嘗テ怪レシム之ヲ。及レ就二試ニ粉―囲一ニ。詩―題乃湘霊鼓ス瑟ヲ、起輟就、即以二鬼―謡十字一ヲ為二落句一。主文季暐、深ク嘉―美ス云云。

［出典］雪玉集、六三四四番。唐詩訓解、帰雁。唐才子伝、第四。

［異同］『新編国歌大観』『新刻李袁先生精選唐詩訓解』ナシ。『唐才子伝』（古典文学出版社、一九五七年）「嘗怪之―嘗怪異之」「粉圍―粉闈」。

［訳］　船中で寝ていると、船を覆う苫（とま）から漏れる雨が降るではないが、古き世（過ぎ去った日々）を偲ぶ思いが琴の音に残っているのだろうか。

唐詩訓解によると、雁が衡陽に至って（北方へ）飛び去るのは、瀟水と湘水の間でのことだ。これは「お前はどうして飛び去るのか」ということを意味する。かの瀟水や湘水の傍にある山水はたいそう美しいので、（雁は帰らずに）すべての巣を一所に託すべきなのに雁が帰るのは、（夫に先立たれた）湘水の女神が二十五絃の

瑟を月に向かって弾じると、雁はその悲しげな音色に耐えられずに飛び去るからである。考えてみると、瑟の（曲の）中には「帰雁操」というものがある。仲文が作った「湘霊鼓瑟」の詩はその当時、称賛された云々。才子伝の巻四によると、起仲文は呉興の人である。初めて計吏に従って京口の宿所に至った。月夜を静かに歩いていると、戸外から詩を吟じる声が聞こえた。その声が吟じることには、「曲が終わると人は去って見えなくなるが、川の上の山々の峯は青いままである」と。およそ往来があるたびに、起はすぐさま付き従って行ったが、（何度行っても声の正体を）見ることはなかった。かつてこのことを怪しんだ。科挙の試験に及び、詩題の「湘霊鼓瑟」は起が付け、（「曲終人不見江上数峯青」の）鬼謡十字を結びの句とした。主の文季暐は、これを深く称賛した云々。

［考察］「ふる」は「降る」と「古」、「こと」は「事」と「琴」の掛詞。昔、黄帝は五十弦の瑟を作らせたが、その音があまりにも悲しかったため、半分に割って二十五弦の瑟としたという伝説がある。その瑟を夫に先立たれた湘水の女神が奏でる伝説（524番歌、参照）を当歌は踏まえ、悲しい音色を偲ぶ。

（倉島実里）

平砂落雁

524猶さりにかへらん波のみきはかは友よふ雁もこゝろ有けり

銭起。瀟湘何事等閑同（ナラサリニ）ル。水碧（リニ）沙明（ナリ）両岸ノ苔。

［出典］雪玉集、六三三九番。唐詩選、巻七、帰雁、七四二頁。［異同］『新編国歌大観』『新釈漢文大系』ナシ。

［訳］　平砂の落雁

波が打ち寄せても、すぐに引き返す水際には、何の心もこもっていないのだろうか。友を呼ぶ雁にさえ、心がこもっているのに。

銭起。瀟湘（瀟水と湘水。洞庭湖に南から流れこむ二つの川のこと）は水清く砂白く、両岸は苔むして、まことにきれいなところなのに、雁はなぜそれをなおざりに見棄てて、北へ飛び帰るのだろうか。

［考察］銭起（唐代の詩人）の詩の続きは、「二十五絃弾二夜月一。不レ勝二清怨一卻飛来」（二十五絃、夜月に弾ずれば、清怨に勝へずして卻って飛び来たる）で、夫舜帝の死により湘水に身を投げて湘水の女神となった二人の妃、娥皇と女英が二十五絃の瑟を月夜に奏でると、その清く哀れな音に堪えかねて、雁は北方へ帰ってしまうと詠んだ。当歌は、雁には心があるのに、すぐに引き返す波にも、また波を引き留めない水際にも心がないと捉えた。

（藤原崇雅）

烟寺晩鐘

525世の中をおとろくへくは沖つ波かゝる所のいりあひのかね

須磨の巻に、又なくあはれなる物は、かゝる所の秋也けり云々。

［出典］雪玉集、六三四三番。源氏物語、須磨巻、一九九頁。［異同］『新編国歌大観』『承応』『湖月抄』ナシ。

［訳］　かすんで見える寺の晩鐘

この世で、はっとして気づくものは、沖から打ち寄せてかかる、このような所の晩鐘であるよ。

須磨の巻によると、またとなく心にしみるのは、このような所（須磨）の秋であったなあ。

［考察］『源氏物語』は、源氏が須磨で暮らしている場面。当歌は、このような所（須磨）にかかる波に、晩鐘を重ね

合わせて詠んだもの。「かかる」は波が掛かると、「かかる所」（このような所）の掛詞。

（藤原崇雅）

晴後遠水

526柏 波間より朝日さしきてなこりなきよるのうしほの遠かたの空

朗詠集。低翅沙鴎潮落時。

［出典］柏玉集、一六七〇番。和漢朗詠集、上、春、暮春、四六番。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『和漢朗詠集』「時―暁」。

［訳］　晴れた後の遠水

波の間から朝日が差し込んできて、夜の満ち潮があとかたも残っていない、穏やかな遠方の空よ。

和漢朗詠集。羽をおさめて下りたった砂上の鴎は、潮の引いた時に遊んでいる。

［参考］典拠は『菅家文草』「晩春遊松山館」の頸聯で、本文は「低翅沙鴎潮落暮」。

（増井里美）

煙

527聞わたるまよひを誰にはるけましふしの烟のたちもたゝすも

古今序。いまはふしの山もけふりたゝすなり、なからのはしもつくるなりときく人は云々。

［出典］雪玉集、二一九五番。古今集、仮名序、二四頁。［異同］『新編国歌大観』「たち―たつ」。『古今集』ナシ。

［訳］　煙

聞き続けている迷いを誰に打ち明ければ、晴らせようか。富士の煙が立つか立たずか、の件も。

古今集の仮名序。今は富士の山も煙が立たなくなり、長柄の橋もつくると聞く人は云々。

[考察]『古今集』仮名序は、和歌が衰退したことを嘆く部分で、古は「富士の煙によそへて人を恋ひ」ていたのに、「今は富士の山も煙立たずなり、長柄の橋もつくる」という表現を踏まえたもの。当歌の「聞きわたるまよひ」は、冷泉流と二条流の解釈の相違を指すと考えられる。

[参考]「ふしの山もけふりたゝす」の「たゝす」、「なからのはしもつくる」の「つくる」は、冷泉家と二条家で解釈が分かれ、『了俊歌学書』によると、冷泉家は「立たず」「作る」、二条家は「絶たず」「尽くる」の説をとる。

（増井里美）

灯

528おもふとちまれのまとゐは久かたの日影につきてむかふともしひ

進学解。焚二膏油一以継レ晷云云。

[出典] 雪玉集、二二〇四番。進学解、一〇二頁。

[異同]『新編国歌大観』『新釈漢文大系　唐宋八大家文読本　一』ナシ。

[訳]　灯

親しい者同士、たまに集まると、昼の日の光に続いて夜の闇を照らす灯を囲んで話し続けるのだ。

進学解。膏油を焚いて、昼に継いで夜も読書して云々。

[考察]「進学解」は、博士が昼に続いて勉強するために、夜、膏油を焚いて学問をすることを、学生が述べた箇所。

（増井里美）

狩猟

529沢にみち山をわたりてみかりするけふのえ物や雨とふるらん

子虚賦曰、王駕二車千一乗一、選二徒萬一騎一、畋二於海浜一。列卒満レ沢ニ、罘網弥レ山ヲ云云。弓不二虚一発一、中ルトキハ必ス決レ眦ヲ、洞レ胸ヲ達シテレ掖ヲ、絶二乎心ノ繫一ヲ。獲若ク雨レ獣ヲ、揜ヒレ草ヲ蔽クスレ地ヲ。

［出典］雪玉集、八〇七四番。文選、子虚賦、七六・八〇頁。［異同］『新編国歌大観』『新釈漢文大系　文選』ナシ。

［訳］　狩猟

士卒達は沢にあふれ、山を駆けて御狩りをされる。今日の獲物は、雨のように降り積もるだろうか。

子虚賦によると、斉王は千台の馬車をしたて、万人の騎兵をよりすぐり、海岸地帯で狩りをされた。士卒たちは谷間にあふれ、獣を狩る網は山々を覆い尽くすほどであった云々。弓から放たれた矢はすべて命中し、あたれば必ず、眼のふちをえぐり、胸を貫き、腋の下へ抜け、心臓の脈を断ち切るのである。こうして、殺された獣の死骸は、そこここに散らばり、天から降ってきたかのようであり、草も地面も覆い尽くされてしまう。

［考察］「子虚賦」の前半では、楚国の子虚が、斉の国に使者として派遣された際に、斉王によってもてなされ、共に狩猟に出掛けた際の出来事を語る。後半では、斉王が子虚に楚王の狩りの様子を語るように頼んだので、子虚が楚王の狩りの様子を語った箇所。当歌は、斉王と楚王の壮大な狩りの様子を踏まえて詠んだもの。

（太井裕子）

寄木雑

530宿りけん跡なつかしみ世々へてもきることなしの影あふく也

詩経。蔽―芾甘―棠、勿レ翦ルコト勿レ伐ツコト、召―伯カ所レ茇。

［出典］雪玉集、七三六五番。詩経、周南、四九頁。［異同］『新編国歌大観』『新釈漢文大系　詩経』ナシ。

［訳］　木に寄せる雑歌

昔、召伯が泊まった跡を今でも偲ぶので、幾代に渡っても伐られることなく生い茂る樹の影を仰ぐことよ。

詩経。こんもり茂ったカタナシの木。翦ってはならぬ。伐ってはならぬ。召伯さまが茇られたところ。

［考察］西周の宣王の時、江漢の地に淮夷を伐ち、南方諸国を平定した召伯虎が、甘棠（カタナシの木）の下で野宿をしたことから、甘棠は聖なる樹木とされ、損なうことは許されなかった。

（太井裕子）

野行幸

531からころもみこしとゝめてぬきかふる狩のよそひも花を折けり

行幸巻云、かくて野におはしましつきて、みこしとゝめ、上達部のひらはりに物まゐり、御装束とも、狩の御よそひなとに改めたまふ程云々。

［出典］雪玉集、四三〇四番。源氏物語、行幸巻、二九二頁。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『承応』『湖月抄』「狩―なをしかり」。

［訳］　野辺の行幸

御輿をとどめ、美しい衣を脱いで着替えた狩衣の装いもまた、華やかであるなあ。

行幸の巻によると、こうして帝は大原野にご到着あそばして、御輿をとどめ、上達部たちが平張の中で食事をなさり、御装束を狩衣などの装いにお着替えになるころ云々。

（梅田昌孝）

物語

532おもひとけは誠しからぬ世かたりもたゝいひなしにそふあはれ哉

蛍巻云、「さても此いつはりともの中に、けにさもあらんとあはれをみせ、つき〳〵しうつゝけたる、はたはかなしこと、しりなから、いたつらに心うこき、らうたけなる姫君の物おもへる見るにかたこゝろつくかし」云々。

［出典］雪玉集、二六一五番。源氏物語、蛍巻、二一一頁。［異同］『新編国歌大観』『承応』『湖月抄』ナシ。

［訳］　物語

よくよく考えてみると本当のことではない物語も、まったくそれらしく言いこしらえてあるので、感慨深さを覚えてしまうなあ。

蛍の巻によると、「それにしても、こうした数々の作りごとのなかに、なるほどそんなこともあろうかとしみじみ人の心を誘い、もっともらしく言葉が連ねられていると、根も葉もないことと分かってはいながらも、わけもなく興をそそられ、いかにもいたわしそうにしている姫君が物思いに沈んでいる有様を見ると、やはり何ほどかは心がひかれるものですよ」云々。

［考察］『源氏物語』は、物語を読みふけっている玉鬘を光源氏が見て、自身の物語に対する考えを語った場面。光源

氏は、物語は作り事ではありながらも、人の心をときめかせるという点では、心ひかれるものである、と評している。当歌も、源氏の発言を踏まえる。

（梅田昌孝）

野酌

533またたくひなきさの花の名残まてあかぬかた野の春の盃

いせ物語云、狩りは念比にもせて、さけをのみのみつゝ、やまと歌にかゝれりけり。いま狩する交野のなきさの家、其院のさくら、ことに面白し。その木の本にをりゐて、枝を折て、かさしにさして、かみ、中、しも、皆歌よみけり云々。

［出典］雪玉集、三六四三番。伊勢物語、八二段。［異同］『新編国歌大観』『新編全集』ナシ。

［訳］　野酌

他に比類なき渚の家に咲く桜の花が散ってしまう、その名残りさえ飽き足りずに愛でる、交野の春の酒宴であることよ。

伊勢物語によると、鷹狩はそう熱心にもしないで、もっぱら酒を飲んでは、和歌を詠むのに熱をいれていた。いま鷹狩をする交野の渚の家、その院の桜はとりわけ趣がある。その桜の木のもとに馬から下りて、桜の枝を折り、髪の飾りに挿して、上、中、下の人々がみな、歌を詠んだ云々。

［考察］『伊勢物語』八二段は、文徳天皇の第一子である惟喬親王が、右の馬の頭（在原業平か）を連れて水無瀬の離宮から交野へと狩りへでかけ、渚の院で酒宴を開いて桜を愛でつつ皆で歌を詠み合う場面。交野は平安時代、皇室

の狩猟地であった。当歌の「なきさ」に「渚」と「（たぐひ）無き」を掛ける。

（永田あや）

厚

534さむき夜にぬきしはさそな世におほふ恵もあつきみけし成けん

十訓抄云、一条院は冬夜、御衣を脱て、「四海の民をおもひやるに、われひとりあたゝかなるへからす」とそ仰せられける。これ又、賢王聖主のあまねき御恵を、黎元黔首までに及したまふ事、古今、不替故也云々。

［出典］雪玉集、八一二一番。十訓抄、一ノ一。［異同］『新編国歌大観』『新編全集』ナシ。

［訳］　厚

（一条院が）寒い夜にお脱ぎになった衣は、天下を包み込む慈悲の恵みも深いように、厚いお召し物であったのだろう。

十訓抄によると、一条院は冬の寒い夜に御衣を脱いで「世の中の民のことを思いやれば、私一人だけが暖かくしていられようか」と仰せられた。これはまた、賢王聖主といわれる方々が、その余すところないお恵みを黎元黔首といわれる下々の人々まで及ぼしなさったことで、昔も今も変わらないのである云々。

［考察］当歌の「あつき」は、「恵もあつき」（恵みも深い）と「あつきみけし」（厚いお召し物）の掛詞。

（玉越雄介）

寄市雑

535よもの民わか大君の市に出てひろきめくみをうるもかしこし

易繫辞曰、神農氏、日中為市、致天下之民、聚天下之貨、交易而退、各得其所。

［出典］雪玉集、二五九八番。易経、繫辞下伝、一五八四頁。［異同］『新編国歌大観』『新釈漢文大系　易経』ナシ。

［訳］　市に寄せる雑歌

多くの民が我が君の開く市に集まり出て、幅広い天下の恵みを得るのも、ありがたいことである。

易経の繫辞下伝によると、神農氏は日中に市場を開設し、天下の人々をそこに至らせるようにし、あわせて天下の財貨を集中させ、交易を行わせて引き上げさせた。それぞれに得たいと望むものを得させたのである。

［考察］『易経』は神農氏の業績を語る箇所。当歌はそれを踏まえて市を統治する大君を称えたもの。

（山内彩香）

名所市

536尋ぬともこたへし物をみわの山わか世は市をかくれ家にして

高士伝註夏部市郭公。

［出典］雪玉集、五二九九番。［異同］『新編国歌大観』ナシ。

［訳］　名所の市

私を訪ねて来ても私は答えないのに。私は三輪山ではなく市場を隠れ家にしている。

高士伝は、夏部の市郭公に注す。（101番歌、参照）

［考察］『高士伝』は戦乱に巻き込まれ、市井に紛れて博徒や物売りとして生きる毛公、薛公という二人の処士について記している。当歌は、三輪山の神が正体を隠して麓の娘のもとへ通うという三輪山伝説も踏まえるか。

［参考］　市郭公　101さはきたつ市をやをのか忍ひ音のかくれ家に鳴山ほとゝきす

高士伝曰、毛公、薛公遭二戦国ノ之乱一ニ、二人俱ニ以二処士一、隠二於耶鄲（邯カ）ノ市一、毛公隠為二博徒一ト、薛公ハ隠二於賣膠一云云。

（壁谷祐亮）

夢

537おもかけのこれ似たりとてもとめ来し夢をわか君の世にもみせはや

書、説命。「夢ニ帝賚（タマフ）ニ予ニ良弼ヲ一。其レ代テ予ニ言ン」。乃審ニシテ厥ノ象ヲ一、俾シム三以レ形旁ク求ニ于天下一ニ。説築レリ傅巖ノ之野一ニ。惟レ肖（ニタリ）。爰ニ立テ作レ相ト一云云。

［出典］雪玉集、七四六三番。書経、下、四三五頁。［異同］『新編国歌大観』「世―代」。『新釈漢文大系』ナシ。

［訳］　夢

面影がほら似ていると思って説を探し求めて来たという夢を、わが君の世にも見せたいものだ。

書経、説命。「夢の中で、天が予にすぐれた輔弼のものを与えて下された。そのものが、予に代わって物を言ってくれることであろう」。そこで、その者の容貌を明らかにし、その姿をもとに広く天下に探し求めさせた。すると、説がそのとき傅巖の原野で版築の仕事をしていた。容貌が夢に現れた人に似ていた。そこで、挙げ用いて宰相とした云々。

［考察］『書経』によると、殷の高宗は父の喪に服して三年間政治について口を開かなかった。そこで臣下が高宗を諫めると、高宗は夢に見た話をして、説を宰相に取り上げた。

538 柏　しらすたれ我にもかして時のまの五十のまくらゆめは見すらん　（壁谷祐亮）

異聞録曰、道者呂翁、経邯鄲道士。邸舎ノ中有二少年盧生一ト云モノ。自歎二其ノ貧困一ヲ。言訖思寐時主人炊二黄粱一為レ饌。翁、乃探二懐中枕以授レ生。枕ノ両端ニ有レ竅。夢中ニ自レ竅入二其ノ家一見二其身一富貴ナルコト五十年老病而卒。欠シ伸シテ而悟ム。顧ルニ呂翁在レ傍主人炊二黄粱一尚未レ熟云云。見于山谷詩集註。

［出典］柏玉集、一八一四番。和刻本漢詩集成、宋詩、四巻、二八九頁。

［異同］『新編国歌大観』「五十―五十年」。『和刻本漢詩集成』「道士―道上」「主人炊黄粱―主人方炊黄粱」。

［訳］　誰か知らないが私にも枕を貸して、私に束の間の五十年の夢を見せてくれるだろうか。

異聞録によると、道者呂翁は邯鄲を通り過ぎようとしている道士であった。茶屋の中に二十歳ほどの盧生という者がいた。自らその貧困を嘆いた。盧生は言い終わって寝ようと思った時、主人は供え物として黄粱を炊いた。すると翁は懐中を探って枕を盧生に授けた。その枕には両端に穴が開いていた。盧生は夢の中でその穴に入って自らの身を見ると五十年間、富貴の身となり老いて病死した。欠伸をして盧生は目を覚ました。辺りを見ると呂翁は傍にいて、主人は黄粱を炊いていて、それはいまだ炊きあがっていなかった云々。山谷詩集註に見える。

［考察］『異聞録』の話は、『山谷詩集註』に引用された「邯鄲の夢」の故事である。

539 世のうきめみえぬよしの丶岩やにもかよひしゆめの道そあやしき　（壁谷祐亮）

元亨釈書、九釈日蔵伝略曰、延喜十六年二月入金峯山椿山寺雍髪。時年十二云云。天慶四年秋、於金峯山経三七日、絶飡不語修密供。八月一日午時、修法之間、忽舌燥気塞。欲呼人相救。又思、已称不言、豈得出声。如是思惟、気息既絶。恍至窟前、窟中有沙門。手執金鈃、傾出瓶水、与蔵飲。其味甘美。沙門曰、「我是執金剛神也。常住此窟、護釈迦遺法。我感上人勤修、故忽往雪山、取八徳水救師渇耳」云云。金峯菩薩令蔵又見地獄。看一鉄窟。中有四人。其形如炭。一人衣覆肩。三人裸裎、蹲赤灰上。獄卒告曰、「是汝本土之君臣也」。時有衣人招蔵曰、「我是大日本国主金剛覚大王之子也。受此鉄窟之苦。彼太政天神以怨心焼仏寺、害有情。其所作罪報、我皆受之。彼太政天者菅亟相也。宿世福力、今為大威徳天神」。乃自説五罪曰、「我受苦無量。汝帰本国、奏国王及宰輔造一万卒都婆、抜我苦厄」。蔵凡過十三日蘇息云云。

［出典］雪玉集、八〇九九番。元亨釈書、上巻、一九八頁。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『訓読元亨釈書』（禅文化研究所）「経三七日―剋三七日」「執金鈃―執金鈃」「卒都婆―率塔婆」。

［訳］　世の中の憂さなどとは縁遠い吉野の金峯山にある岩屋で、日蔵は夢を見たが、その夢の中で冥界に通じる道を通ったとは不思議なことだ。

元亨釈書の九釈日蔵伝の略によると、（日蔵は）延喜十六年二月に金峯山の椿山寺に入って剃髪した。その時の年齢は十二歳である云云。天慶四年秋、金峯山において三週間を過ごし、食を絶ち、話すこともしない密供

の修行を行った。八月一日午の時、修行の間ににわかに舌が渇き、気が塞がってしまった。人を呼んで救いを欲した。また思うことには、（私は）既に沈黙行中の身である。どうして声を出すことができようか。このように思い正しているうちに、呼吸は既に絶えてしまった。ぼんやりとした状態で、ある洞窟の前に至ると、洞窟の中には沙門がいた。手には金の瓶を持ち、瓶を傾けて水を出し、日蔵に与えて飲ませた。その味は甘美であった。沙門の言うことには、「私は執金剛神である。いつもこの洞窟に住み、釈迦の遺法を護っている。私はあなたの熱心な修行に感じ入り、すぐに雪山におもむいて八徳水を手に入れ、あなたの渇きを救っただけだ」云云。金峯菩薩はまた、日蔵に地獄を見せた。ある鉄窟を見ると、その中には人が四人いた。その形は炭のようで、その内の一人は衣で肩を覆い、（残りの）三人は裸で赤灰の上に蹲っている。獄卒が告げて言うことには、「これはお前の本土の君主と臣下である」と。そのとき、衣を身に着けている者が日蔵を招いて言うことには、「私は大日本国主金剛覚大王（宇多法皇）の子（醍醐天皇）である。この鉄窟の苦しみを受けている。かの太政天神が怨みの心を持って仏寺を燃やし、有情を害した。その罪の報いは私が全て受けている。かの太政天とは、菅丞相（菅原道真）のことである。（菅丞相は）宿世の福力により、今は大威徳天神となっている」と。そして、自ら五罪を説いて言うことには、「私が受ける苦は計り知れない。お前が本国に帰ったならば、国王及び宰輔に奏上して一万の卒都婆を造り、私の苦厄を取り除いてくれ」。日蔵は凡そ十三日後に蘇生した云云。

［考察］日蔵は浄蔵の弟子。『北野天神縁起』（弘安本、中巻）にも類話が見られる。

（倉島実里）

540かそへみし一夜の夢の十なからとをき世にあふ道もかしこし

［出典］雪玉集、五五〇〇番。［異同］『新編国歌大観』ナシ。

［訳］　数えてみると十夜続けて夢を見たが、現在から遠い世を夢の中で見られるとは、素晴らしいことだ。

［参考］底本には和歌のあと、四行分の空白がある。この箇所に典拠を記す予定であったか、あるいは刊行する直前に削ったかと思われる。

（藤原崇雅）

親

541柏初かせの秋そ身にしむともしひも窓にそむけぬ心すゝめて

古文前集、時秋ニシテ積雨霽ル。新涼入ニ郊墟一。燈火稍可レ親、簡編可ニ巻舒一。

［出典］柏玉集、一八一九番。古文真宝前集、符読書城南、二〇頁。

［異同］『新編国歌大観』「ともしひも―灯の」。『新釈漢文大系』ナシ。

［訳］　親しむ

秋の初風が身に心地よい頃となったので、灯火も窓の方へ向けず、学問に集中できることだ。

古文（真宝）前集によると、今や時候は秋で、長雨がはれて、新涼の気が城外の村に入りこみ、灯火もようやく親しめるようになったので、書物をひもとくこともできるであろう。

［考察］「符読書城南」は、親が子に学問を勧める心を詠んだもの。

［参考］「燭を背けては共に憐れむ深夜の月　花を踏んでは同じく惜しむ少年の春」（『和漢朗詠集』上、春、春夜、二

七番）

述懐

（藤原崇雅）

542けさの間の夕をまたぬ身なりとも道あるみちをいかてきかまし

論語。朝聞道、夕死可矣。

［出典］雪玉集、二四三二番。論語、里仁第四、九一頁。［異同］『新編国歌大観』『新釈漢文大系』ナシ。

［訳］　述懐

朝方が過ぎてしまったら、夕べを待たずに死んでしまう身であっても、道というものがあるなら、どうにかしてでも聞くだろう。

論語。もしも朝方に我々が当然行わなくてはならない人の道を聞くことができたら、かりにその晩に死んだとしても、まず満足すべきであろう。

［考察］『論語』は、道を知ることが人の最大の目的であることを説いた一節。

寄弓述懐

（藤原崇雅）

543おなしその人やとらんと梓弓おしまぬしもそおろか成ける

［出典］雪玉集、二八四八番。［異同］『新編国歌大観』「おしまぬ―をしまぬ」。

［訳］　弓に寄せる述懐

自分と同じ楚の国の人が弓を取るだろうと言って、楚の国の恭王は名弓を失っても惜しまなかったが、それは孔子から見ると、愚かなことなのだなあ。

［考察］典拠は544番歌と共通。

（増井里美）

544柏　梓弓うれはうしなふことはりは心をわかむ物としもなし

憂喜依人

家語曰、楚恭王出遊亡烏嚊ノ之弓ヲ。左右請レ求レ之ヲ。王曰、「止。楚王失レ弓ヲ、楚人得レ之ヲ。又何ンソ求レ之ヲ」。孔子聞テ曰、「惜カナ乎、其不レルコト大ナラ也。不レ曰ハ人遺ルレ弓ヲ、人得レ之ヲ而已。何ンソ必ズシモ楚ノミナラン也。

［出典］三玉和歌集類題、憂喜依人。孔子家語、好生、一二九頁。

［異同］『三玉和歌集類題』ナシ。『新釈漢文大系』「孔子聞テ曰―孔子聞之曰」。

［訳］　憂喜は人に依る

名弓を手に入れても失うのがこの世の道理であるから、（弓を失っても、誰かがその弓を得るのだと考えると）悲しんだり喜んだりするには及ばない。

孔子家語によると、楚の恭王が城から出て遊ばれたとき、烏嚊と名づけた良弓を失われた。近習の者は、これを探し出そうと申しあげた。王は、「止めておきなさい。楚の王である私が弓を失っても、どうせわが国の民がこれを拾うのだ。どうして探し出すことなどしようか」とおっしゃった。孔子はこれを聞いて、「惜しいなあ、王はいささか了見が狭い。人が弓を落として、それを人が手に入れるだけのことだ、と言えばよかったの

に、どうして楚と限定してしまう必要があろう」と言った。

［考察］『孔子家語』は、政治の根本的なあり方について述べた箇所。

（増井里美）

寄歌述懐

545色につき花になすなよさてのみそ世に埋木の言の葉の道

古今序。いまの世中、色につき、人の心、はなになりにけるより、あたなる歌、はかなきことのみ出くれは、色このみの家に埋木の、人しれぬこと、なりて。

［出典］雪玉集、二六四四番。古今和歌集、仮名序、二二頁。［異同］『新編国歌大観』『古今和歌集』ナシ。

［訳］　歌に寄せる述懐

表面だけの美しさに気をとられ、言葉を華美に飾り立てるでないぞ。そのようにしてばかりいると、和歌の道は埋もれ木のように世間に埋もれてしまうのだから。

古今集の仮名序。当節は世の中が華美に走り、人心が派手になってしまった結果、内容の乏しい歌、その場限りの歌ばかりが現れるので、歌というものが好色者の間に姿を隠し、識者たちに認められぬことは埋れ木同然になって。

［考察］『古今集』仮名序は、世の中で表面上のことだけが求められ、和歌も華やかなだけで浅薄なものがもてはやされるようになったことを嘆く部分。当歌はそれを踏まえて、和歌の道に精進するよう勧めるもの。

（増井里美）

述懐

546あまれりやたらすやとたに何か思ふけふのまゝなるあすもしらしを

いせ物語云、ゐなか人の歌にてはあまれりやたらすや。

［出典］雪玉集、七二四二番。伊勢物語、八七段。［異同］『新編国歌大観』『伊勢物語』ナシ。

［訳］　述懐

余っているだろうか、足りないだろうか、とさえどうして思い悩むのか。今日の続きで明日のことも分からないだろうに。

伊勢物語によると、田舎人の歌としては十分な出来だろうか、まだまだというところだろうか。

［考察］『伊勢物語』では、田舎人が詠んだ歌としてはまずまずだろうと評している。当歌はその言い回しを用いて、無常の世の中に思い悩んでも仕方がないと詠む。

（太井裕子）

547かひなしやけふは昨日のよしあしをおもひわきても改めぬ身は

帰去来辞曰、実ニ迷レ途其レ未タ遠、覚二今是ニシテ而昨ハ非ナランコトヲ。

［出典］雪玉集、四七四七番。文章規範、帰去来辞、五三〇頁。

［異同］『新編国歌大観』『新釈漢文大系　文章規範』ナシ。

［訳］　今日になって、昨日の私が間違っていたかどうか判断できても、行いを改めなければ、どうしようもないなあ。

帰去来辞によると、全く私は道に踏み迷いはしたものの、まだ遠くまで行ってしまったわけではない。今の私が正しく、過去の宮仕えをしていた頃の私が間違っていたことはわかっているのだ。

［考察］「帰去来辞」は、陶淵明が役人を辞し、今までの暮らしを悔いて、いざ郷里へ帰ろうと思い立つ場面。当歌は過去の過ちに気づいても、悔い改めるに至らぬ我が身を嘆く意。

（太井裕子）

548何かおもふ人にもかなし我にをきてうかへる雲の行末の空

論語。不二義ニシテ而冨且一ツ貴キ於レ我如二浮雲一。

［出典］雪玉集、二四三七番。論語、述而篇、第七、一五八頁。

［異同］『新編国歌大観』『新釈漢文大系　論語』ナシ。

［訳］（不正な行いをするとは）何を考えているのだろうか。人としても悲しいことよ。（正しくない行いによって得た富と名声は）私にとってはまるで浮雲が空の彼方に流れて行くようにはかないものだ。

論語。正しくない行いによって得た富と名声は、私にとっては浮雲のように何の意味も価値も持たない。

［考察］『論語』述而篇は、晩年の孔子の人生観の簡潔な吐露であり、不正な手段で富裕になる出世主義者と自分とは無関係であると述べた部分。当歌はその出世主義者たちの行く末を嘆いたもの。

（玉越雄介）

549いかにして月をおもふもしるへなき闇をはるけむ敷嶋の道

古今集序云、いにしへの世〻の御門、春の花のあした、秋の月の夜毎に、さふらふ人々をめして、ことにつけ

つゝ歌を奉らしめ給ふ。あるは花をそふとてたよりなき所にまとひ、あるは月をおもふとてしるへなき闇にたとれる心〳〵を見たまひて、さかしおろかなりとしろしめしけん云々。

［出典］雪玉集、七四六一番。古今集、仮名序、二二頁。［異同］『新編国歌大観』『新編全集』ナシ。

［訳］　月に想いを馳せても道案内をしてくれる人もおらずに闇の中を彷徨っていたが、和歌の道はその闇をどのようにして晴らしてくれるだろうか。

古今集の仮名序によると、昔の代々の帝達は、花の咲いた春の朝、月の美しい秋の夜ともなれば、いつもお付きの人々をお召しになって、常に何かにつけ歌の詠出をお求めになった。ある時は花に託して思いを述べるため不案内の山野を彷徨い、またある時は月を愛でるために案内する人もいない見知らぬ土地をまごつき歩いた人々の心中を、歌を通して御覧になって、彼等の賢愚を識別なさったのであろう云々。

［考察］『古今集』仮名序は、和歌の歴史について述べた箇所であり、古代の天皇達は折に触れて歌の詠出を近臣達に求め、彼等の詠んだ和歌を通して、その才能を見抜こうとしていたことを述べる。当歌は月を題にして歌を詠むよう帝に求められたが、どのようにして詠むべきか教えてくれる人もいず、暗中模索して和歌の道の険しさに悩む近臣の思いを詠んだもの。

（玉越雄介）

寄玉述懐

550くもり有心をおもへしら玉はかけてもみかくためしやはなき

白圭之玷タルハ尚ヲ可レ磨也。斯言之玷タルハ不レ可レ為也。

［出典］雪玉集、二四四五番。詩経、二一〇頁。［異同］『新編国歌大観』『新釈漢文大系　詩経下』ナシ。

［訳］　玉に寄せる述懐

迷いのために曇った心を省みて精進しなさい。白玉は欠けても磨けなかった例があろうか、いやないのだから、心も同様である。

白圭（白く清らかな玉）の欠けたものは、磨けばよい。だが言葉の至らぬものは、どうにもならぬ。

［考察］典拠は『詩経』「蕩之什」抑篇の一節。不測の事態に備え、思慮に欠けた言動を慎むことを諭す箇所で、言葉の過ちは取り返しのつかないことを玉にたとえて述べている。当歌はこの一節を踏まえて、人の心を玉にたとえた。

（永田あや）

寄水懐旧

551ゆくものはかくこそと思ふ山水のはやくの世々に袖はぬれつゝ

論語。子在川上曰、逝者如斯夫。不舍昼夜。

［出典］雪玉集、五六八三番。論語、二一〇四頁。［異同］『新編国歌大観』『新釈漢文大系　論語』ナシ。

［訳］　水に寄せる懐旧

過ぎ去って帰らぬものは、このようであろうかと思われる。山の川の速い流れのように、速やかに移ろう時の流れに、水ではなく涙で袖が濡れることだ。

論語。孔子が、ある時、川のほとりに居て、流れてやまない川の水をながめて詠嘆していうには、過ぎ去って

帰らぬものは、すべてこの川の水のようであろうか。昼となく夜となく、一刻も止むことなく、過ぎ去っていく。人間万事、この川の水のように、過ぎ去り、うつろっていくのだろう。

［考察］典拠は『論語』「子罕」篇、川の流れのように一所に止まることなく移ろっていく人の営みを思い、孔子がむなしく老いていくわが身を詠嘆した箇所。当歌は、山水の風景に孔子と自らの心情を重ねて、時の流れの速さを嘆いている。なお499番歌、参照。

（永田あや）

田家懐旧

552打わひてひろふおち穂のおちふるゝ身に長岡の哀をそしる

いせ物語云、むかし色このみなる男、長岡といふ所に家つくりてをりけり云々。この女とも、「穂ひろはむ」といひけれは　打わひておち穂ひろふとー。

列子、天瑞篇曰、行〳〵歌テ拾レ穂ヲ林ー類行テ不レ留歌テ不レ輟。

［出典］雪玉集、五三九九番。伊勢物語、五八段。列子、天瑞第一、第八章、三八頁。

［異同］『新編国歌大観』『新編全集』『伊勢物語拾穂抄』『新釈漢文大系　列子』ナシ。

［訳］　田家の懐旧

悲嘆にくれて落穂を拾う落ちぶれた私の身に、長岡での田舎生活の哀しさが知られることですよ。

伊勢物語によると、昔、恋の情趣を心得ている男が、長岡という所に家を造って住んでいた云々。この女たちが、「落穂を拾いましょう」と言ったので、「生計に困っておち穂ひろいをなさるとー」。

列子の天瑞篇によると、歌いながら穂を拾って歩いていて、林類は歩き続けて留まりもせず、又、歌い続けてやめもしなかった。

［考察］『伊勢物語』は、男が長岡（長岡京があった地）という田舎に家を造って住んだことを描いた段。『列子』は、林類が落穂を拾うという貧しい生活をしながらも楽しんでいる様子を描いた場面。当歌は長岡が田舎であること、落穂拾いが貧者の行ないであることを踏まえ、田舎での生活の悲哀を詠んだもの。

（梅田昌孝）

懐旧

553年〳〵の春の草にも埋れぬ名のみその世の花のかけかな

［出典］雪玉集、八一〇四番。白氏文集、巻二、諷諭二、古調詩五言。

白氏文集。古―墳何―ノ世ノ人ヲ。不レ識二姓ト与レ名。化シテ作二路―傍ノ土。年―々春―草生ス。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『白氏文集』（那波本）「古墳―古墓」「不識―不知」。

［訳］　懐旧

年々生え替わる春の草にも埋もれないように、今なお聞こえるその名声こそ、人生の栄花であるなあ。

白氏文集。いつの世の誰の墓やら知る由もないが、春草は年々生えるが墓の主は永遠に覚めることはない。

［考察］『白氏文集』は、墓の前では春の草が年々生え替わるが、墓に眠る主は目覚めることはないという人生の無常を歌ったもの。当歌はこれを踏まえ、年々生え替わる春の草に埋もれてしまうものもある中、一生の内で栄えた名前だけは、埋もれずに今なお栄えているということを讃えた歌である。

（梅田昌孝）

554 柏 鳥の跡に残るを見ても世々の道飛たつはかり昔恋しき

淮南子、見于春部。

万葉集、貧窮問答歌。世中をうしとはさしもおもへともとひたちかねつ鳥にしあらねは

［出典］雪玉集、三七五〇番。万葉集、巻五、旧八九三番、新八九七番。

［異同］『新編国歌大観』「残るを―のこる世」。『万葉集』（西本願寺本）「うしとはさしも―うしとやさしと」。

［訳］　文字で書き残されてきたこの世の歴史を見るにつけても、昔の世が、飛び立って行きたいほどに恋しく思われることだよ。

淮南子、春部に見える。（71番歌、参照）

万葉集、貧窮問答歌。世の中はいやなものだと、そういうふうに思うけれど、さて飛び去ることもできない。鳥ではないので。

［考察］『淮南子』は、蒼頡が鳥の足跡を見て、初めて文字を思いついたという故事を記す。『万葉集』は、つらいこの世から飛び立ちたいが、鳥ではないのでそれができないという嘆きを歌う。当歌はこれらを踏まえ、文字で書き残されて来たこの世の歴史を振り返り、過去の世へ鳥のごとく飛び立って行きたいという、懐旧の思いを詠んだ歌。

［参考］71色も香もあかぬ春かな鳥の跡をうつすなかれの花のさかつき　淮南子曰、昔シ蒼頡作レ書ヲ而天雨レ粟ヲ鬼夜ル哭ス。許慎カ曰、蒼頡始テ視テ鳥跡ノ之文ヲ造二書契一ヲ。則詐偽萌生ス云云。

（梅田昌孝）

樵客情

555陰にきて休むたにこそ身におはぬ花をも折か春の山人

［出典］雪玉集、二三六一番。［異同］『新編国歌大観』ナシ。

［訳］　木こりの旅情

花の陰に来て休むだけなのに背負わない花をも折るか、春の山人よ。

［考察］当歌より三首続いて、同じ典拠（557番歌に掲載）を踏まえる。

（山内彩香）

樵路嵐

556休み来し木かけやいかに折そふる薪の花もあらしふく也

［出典］雪玉集、二三六二番。［異同］『新編国歌大観』ナシ。

［訳］　木樵の通う道の嵐

いつも休んでいた木陰は、嵐が吹いてどうであろうか。折って薪に添えた花にも嵐が吹くようだ。

（山内彩香）

樵路日暮

557休らはむ花なきころの山人はいかにくらしていまかへるらん

古今序云、大伴の黒主は、其さまいやし。いはゝ薪おへる山人の花の陰にやすめるかことし。

［出典］三玉和歌集類題、樵路日暮。古今集、仮名序、二八頁。［異同］『三玉和歌集類題』『古今集』ナシ。

［訳］　木樵の通う道の日暮

休むのに使っていた花が咲いていない時期の山人は、どのように日暮れまで過ごして今帰るのだろうか。

古今集の仮名序によると、大友黒主の歌は、姿がひなびている。いってみれば、薪を背負った山人が花の陰に休んでいるような様である。

（山内彩香）

樵夫

558薪とるおなしその身のくるしさに法の為なる道しらせはや

提婆品。採薪及菓蓏、随時恭敬与。

［出典］雪玉集、二三六〇番。法華経提婆達多品第一二。［異同］『新編国歌大観』『大正新脩大蔵経第九巻』ナシ。

［訳］　樵夫

薪を採る重労働に苦しむ木こりに、あなたは昔の釈迦と同じ身であり、その仕事は仏教のためになりますよ、と教えたいものだ。

提婆達多品。薪や木の実、草の実を採って、いつも（私は聖仙を）慎み敬った。

［考察］提婆達多品の句は、前世で釈迦が「妙法蓮華経」を授かるために、その教えを知る聖仙のもとで働いたことを説く。

（壁谷祐亮）

浦嶋子

559玉くしけ明れはなひく白雲の行末かなしき浦風の空

浦嶋子伝、見于恋部。

［出典］雪玉集、二六〇五番。［異同］『新編国歌大観』ナシ。

［訳］　浦嶋子

神女からもらった玉櫛笥（たまくしげ）（美しい櫛箱）を開けると出てくる白雲が浦風に吹かれてたなびき、空の彼方に行くのが悲しいことだ。

浦嶋子伝は、恋の部に見える。（464番歌、参照）

［考察］「浦嶋子伝」の最後は、浦嶋子が神女からもらった玉櫛笥を開けてしまい、そこから出てきた煙に覆われて急速に年を取って死んでしまう。当歌はその場面を踏まえ、玉櫛笥から出てきた白雲が浦風にたなびいて空の彼方に消えてしまう悲しさを詠んだもの。

［参考］　寄雲見恋　464柏

なにゝこの身をうらしまに立雲の見ては悔しき思ひそふらん

浦嶋子伝及扶桑略記載。雄略帝ノ時、丹後国与謝ノ郡ニ有水江ノ浦嶋子ト云者。釣亀ヲ水江ニ、化シテ為レ女、於レ是浦嶋子与レ女到常世ノ国海神ノ之都ニ、蓋シ龍宮也。浦嶋子不レ老不レ死、其ノ後欲下帰上故里ニ省中父母ヲ上。時ニ神女授ニ与玉匣ヲ曰、「欲セハ再来レト此ニ者必ス勿レ開クコト斯ノ箱ヲ」。浦嶋子還テ郷ニ見レ之ヲ知者無ニ一人ニ。驚怪テ問レ人ニ々答曰、「聞昔シ浦嶋子ト云者遊テ海ニ遂ニ不レスト返」。於レ是始テ知ニ其ノ到ルコトヲ蓬莱ニ、而急ニ将レ赴ントス神女ノ所ニ。向レフニ海ニ不レ知ニ在ニ所ト云コトヲ何許ニ也。浦嶋子惘然トシテ憂レ之ヲ忘レテ神女ノ言ヲ、而少開ニ玉匣ヲ紫雲忽チニ出テ霧ニ於常世ノ国ニ。浦嶋

子大ニ悔ユ。其ノ顔俄ニ為ニ老翁遂ニ死ス。干時天長二年也。従ニ雄略御宇一至レ此蓋三百四十余年云云。

（壁谷祐亮）

遊女

560からろおす水の煙の一かたになひくにもあらぬうきみをや思ふ

朗詠集、順、遊女。和琴緩ク調ヘテ臨ニ潭月一ニ。唐櫓高ク推シテ入ニ水煙一ニ。

［出典］雪玉集、二三七一番。和漢朗詠集、下、遊女、七二〇番。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『新編全集』「和琴―倭琴」。

［訳］　遊女

唐櫓を推して進む水上のもやは一方向にたなびくが、一人にだけなびくわけにはいかない辛い身を思うのだろうか。

和漢朗詠集、源順、遊女。倭琴を緩やかに爪弾きながら、深い淵に映る月影の下で舟べりにたたずんでいる遊女がいるかと思うとまた、ある者は、唐風の櫓の音も高らかに、水上のもやの中を漕いでゆく。

［考察］当歌の「一かた」は、一方向と一人の意味を掛ける。

（壁谷祐亮）

妓女

561たをやめの赤裳のこしは浅みとり春の柳のなひくをそみる

白氏文集。粧ヒ閣妓ヒ楼何ッ寂ヒ静ナル。柳ハ似ニ舞ノ腰ニ池ハ似レ鏡。

遊仙窟曰、依々タル弱柳、束ネテ作スニ腰支コシハセトヲ。

［出典］雪玉集、四三四五番。白氏文集、巻四、両朱閣、七一頁。遊仙窟、三二頁。

［異同］『白氏文集』（神田本など）『遊仙窟全講』（明治書院）ナシ。

［訳］　妓女

たおやかな妓女の朱色の裳を付けた腰は、春の柳の浅緑色の葉がなびくのを見るようだ。

白氏文集。妓女の住む粧閣や妓楼はどうして静かなのか。柳は舞人の腰に似ており、池は鏡に似ている。

遊仙窟によると、なよやかなしだれ柳を束ねて腰とする。

［考察］女性のしなやかな肢体や腰つきは、しばしば柳に譬えられた。当歌は妓女の赤裳を身につけた腰つきを見て、春の風に柳がなびく様子を思い浮かべて詠まれた歌。

（倉島実里）

王昭君

562霜のゝち夢のみ遠くわかれ来しみやこの月にすむもはかなし

後江相公。胡角一声霜ノ後ノ夢、漢宮万里月ノ前腸。

［出典］雪玉集、四三四四番。和漢朗詠集、下、王昭君、七〇一番。［異同］『新編国歌大観』『新編全集』ナシ。

［訳］　王昭君

夜になって霜が降りた後、夢の中にだけ遠く別れて来た漢の都の澄んだ月のもとに住めるとは、はかないことだなあ。

後江相公（大江朝綱）。胡人の吹くもの悲しい角笛の音色が一声、霜気を帯びた夜空に響き、夢を破られる。懐かしい漢の宮殿は万里の彼方に遠ざかり、月下に望郷の思いにふけっていると、断腸のつらさがこみあげる。

［考察］当歌は匈奴の王に嫁がされ、望郷の思いを抱きつつ彼の地に没した王昭君の孤独な心情に寄り添って詠じられたもの。

（倉島実里）

563恨しなおもへはひなのおとろへをかねてや筆のうつし置けん

［出典］雪玉集、七二六四番。白氏文集、巻一四、王昭君二首、二〇七頁。

［異同］『新編国歌大観』『新釈漢文大系』ナシ。

［訳］　白氏文集。満レ面胡一沙満レル鬢ニ風、眉ハ銷ニ残黛一瞼ハ銷セリ紅ヲ。愁苦辛勤憔一悴尽ヌレハ、如イ今却テ似タリ二画一図ノ中ニ。

もはや恨まないでおこうよ。思えば都から離れた所での衰退の様子が、前もって絵筆で写されていたのだろう。

［考察］王昭君は漢の元帝の宮女であったが、宮廷の画工に賄賂を送らなかったため、肖像画を醜く描かれ、匈奴の呼韓邪単于に嫁がされ、彼の地において窮苦の後に没した。『白氏文集』も当歌も、晩年の王昭君のうらぶれた心

白氏文集。顔一杯に吹きつける沙漠の砂や、髪を吹きぬける風のために、眉には眉墨のあとも消え、顔の頬紅も失せてしまった。慣れぬ胡地の苦労に見る影もなく窶れ果てて、今のこんな私こそ、情なくもかつて宮中で醜く描かれた肖像画そっくりである。

境を詠んでいる。

（藤原崇雅）

564雪のうち猶草青き塚のうへに終にかれせぬ思ひをそしる

旧註前漢云、昭君死ス。番怜レム之ヲ。遂ニ葬ニ於漢ノ界一ニ、号ニス青塚一ト云云。

明妃曲註曰、昭君服レ毒ヲ而死ス。挙レ国葬レル之ヲ。胡中多ニ白草一。而、此ノ塚独リ青シ。故ニ曰ヌ青塚一ト。

［出典］雪玉集、三六四六番。胡曾、詠史詩、青塚。古文真宝前集、曲類、明妃曲二首（王介甫）。

［異同］『新編国歌大観』『詠史詩』（四庫全書）ナシ。『古文真宝前集』（榊原篁洲編『漢籍国字解全書　第十一巻』早稲田大学出版部、一九一〇年）「塚独―塚草独」。

［訳］　雪のなかでもなお塚の上に生えている青い草が枯れないように、その思いはいまだに涸れていないことを知ることだ。

旧註前漢によると、王昭君が亡くなり、匈奴はこれを憐れんだ。結局、漢との境界に葬られ、これを青塚と呼んだ云々。

明妃曲の旧註によると、王昭君は毒を飲んで死に、国を挙げて葬られた。胡の国の中には白い草が多いが、王昭君の塚の上にだけ青い草が生えたので、青塚と呼ぶようになった。

［考察］「旧註前漢」は、胡曾『詠史詩』巻下「青塚」詩に引かれた『前漢書』（唐・顔師古撰）の一部分。ただし現在の『前漢書』には見当たらない。「明妃曲註」は、王介甫（宋代の詩人・政治家である王安石の字）作「明妃曲二首」に付されたもの。「明妃」は王昭君を指す。

（藤原崇雅）

楊貴妃

565なき玉のありかはきゝついかにして身をまほろしになしてゆかまし

長恨歌伝曰、適有二道士一自レ蜀来レリ。知下皇ノ心念二貴妃一如上レ是、自レ言フ有二季少君ノ之術一。玄宗大ニ喜テ、命シテ致二其ノ神一云云。使者還テ奏ス二太一上一皇ニ。々ノ心震一悼シテ、日ニ不レ予ミ玉ハ云云。

［出典］雪玉集、七二六三番。長恨歌伝、七九四頁。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『新釈漢文大系　白氏文集（二下）』『新釈漢文大系　唐代伝奇』「貴妃―楊妃」「日ニ―日日」。

［訳］　楊貴妃

亡くなった美しい楊貴妃の魂の居場所は、道士から聞いた。なんとかしてこの身を、幻術を使う者に変えて、楊貴妃のところに行ければよいのになあ。

長恨歌伝によると、ちょうどその頃、蜀からやって来た道士がいて、玄宗がこれほどまでに楊貴妃のことを思いつめているのを知ると、自ら李少君の方術を心得ていると申し出てきた。玄宗はたいへんに喜んで、彼女の魂を呼び寄せるように命じた云云。使者は帰還すると太上皇にこのことを奏上したが、陛下の心中は悲しみでひどく動揺し、日に日に気分が塞いでゆく云云。

［考察］『長恨歌伝』は、玄宗皇帝が亡くなった楊貴妃を偲ぶあまり、道士に彼女の魂を呼び寄せさせた部分。当歌の「なき玉」の「玉」は、魂（たま）に玉のような美しさと、『長恨歌』に記されている楊貴妃の生まれ変わった後の名である

玉妃を掛けるか。

［参考］「たづねゆくまぼろしもがなつてにても魂（たま）のありかをそこと知るべく」（『源氏物語』桐壺の巻）

（増井里美）

566まほろしに見えしもはかな身をかへし此世の外の山なしの花

長恨歌。玉―容寂―寞涙欄―干。梨―花一―枝春帯レ雨ヲ。

［出典］雪玉集、三六四八番。長恨歌、八一五頁。

［異同］『新編国歌大観』『新釈漢文大系　古文真宝前集』ナシ。『新釈漢文大系　白氏文集（二下）』「欄干―瀾干」。

［訳］　幻で見えたのも、はかないものだなあ。楊貴妃がその身を変えた姿は、死後の世界の山の中に咲いている梨の花のようであったなあ。

長恨歌。玉のような顔は寂しげで、その頬を涙がとめどなく流れ落ちるさまは、一枝の梨の花に、春の雨が細やかに降りかかっているような風情である。

［考察］『長恨歌』は、玄宗皇帝のために楊貴妃の魂を追ってきた道士が楊貴妃の魂と出会い、その身の美しさを述べた部分。当歌はその一節をもとに、たとえ道士が死者の魂と出会うことができたとしても、それは幻にすぎず、はかないものだという嘆きを詠む。「此世の外の山」は道士が訪れた仙山を指す。

（増井里美）

李夫人

567物いはぬ嘆きをさらにたきそへてけふりのうちの俤もうし

白氏文集曰、漢武帝初喪二李夫人一ヲ甘泉殿ノ裏ニ令レ写二真丹（カタチヲ）一青ニ画一出竟ニ何ノ益ッ不レ言不レ笑愁二殺人一君ヲ一。九華帳深シテ夜悄々返一魂一香ハ返ス二夫一人魂ヲ一夫一人ノ之魂ハ在ル二何ノ許ニカ一香一煙ニ引レテ到二焚レ香ヲ処一。

［出典］雪玉集、七二六四番。白氏文集、巻四　新楽府、李夫人。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『白氏文集』（那波本）「愁殺人君―愁殺人」、「返魂―反魂」、「返夫人―降夫人」。

［訳］　李夫人

肖像画の中の愛しい人が何も言わない嘆きをさらに添えるかのように、反魂香で呼び返した煙の中に見える面影をも、辛く思ってしまうことだ。

白氏文集によると、漢の武帝はさきごろ李夫人を喪った。甘泉殿に夫人の肖像画を描かせたが、絵具で書いたものが結局何の足しになろう。ものも言わなければ笑いもしない、これを見る天子を悲しませるだけのこと。（中略）かくて、幾重もの花模様のついた、美しいとばりの奥で、夜もひっそりと静まる頃、修験者の焚きしめる反魂香が、ついに夫人の魂をよび返す。さて、よび返された夫人の魂は果たしていずこ、香の香に導かれて、修験者が香を焚くところまでやってくる。

［考察］『白氏文集』の「李夫人」は色に溺れることを戒めた作品であるが、当歌は愛する者としみじみと話すこともできない悲しみを詠む。

（太井裕子）

上陽人

568まゆすみもうつりかはりてあらぬ世のうとき人には見えん物かは

新楽府云、上陽ノ人、紅顔暗ニ老テ白髪新ナリ云云。青黛点シテ眉ニ々細ク長シ、外人ニハ不レ見々ヘナハ応レ笑。

［出典］雪玉集、七二六六番。新楽府、上陽人。［異同］『新編国歌大観』『和刻本漢詩集成』『白楽天全詩集』ナシ。

［訳］　上陽人

黛の描き方もすっかり変わってしまったが、（私の住む世界とは）違う世界に住む疎遠な人達に私の顔を見られることはあろうか、いや、ないだろう。

新楽府によると、上陽宮に閉じこめられている宮仕えの女性は、花のような顔もいつしか年老いてしまい、今では白髪の老婆になってしまった云々。青い黛で細長く描いた眉は、宮殿の外の人々が見ないからよいが、もし見られたら間違いなく笑われるだろう。

［考察］「上陽人」は、玄宗皇帝の御代に宮中に入った女性が楊貴妃によって上陽宮に追いやられ、いつしか白髪の老女になってしまった場面。当歌は老女になった今でも黛をつけて化粧をしているが、その化粧は四、五十年前に宮中に入ったときと同じなので、世間の人々が見れば笑うだろう、と上陽白髪人に同情を寄せて詠んだ歌。

（玉越雄介）

569春や来ぬ秋やこしとも幾めくりこたへぬ月に身をかこちけん

新楽府。春往秋来レトモ不レ記レ年ヲ。唯向ツテ深宮ニ望メハ明月ヲ東南四五百廻円ナリ。今日宮中年最老タリ。

［出典］雪玉集、三六四七番。新楽府、上陽人。

［異同］『新編国歌大観』『和刻本漢詩集成』ナシ。『白楽天全詩集』「東南四五百廻―東西四五百廻」。

［訳］　何度目の春と秋がやってきたのですか、と尋ねても答えてはくれない月に向かって、いつの間にか年をとっ

てしまった我が身を嘆いただろうか。

新楽府。春が過ぎて秋が来るが、何年経ったのかは記憶していない。ただ、上陽宮の中から美しい月を見上げると、東から南へとめぐる満月を四五百回は見たであろう。今となっては私は宮中での最年長者である。

［考察］当歌も568番歌と同じ『新楽府』上陽人を題材とし、上陽宮で月を見ながら数十年にも及ぶ宮中生活に思いを馳せたもの。

（玉越雄介）

陵園妾

570 月もまたいかに見さらん松の門いてやとおもへと消はてぬ身を

白氏文集。松門暁到月徘徊、柏城尽日風簫瑟。

［出典］雪玉集、三六四七番。新楽府、陵園妾。［異同］『新編国歌大観』『和刻本漢詩集成』『白楽天全詩集』ナシ。

［訳］　陵園妾

月もまた、なぜ見てくれないのだろうか。松の門の外へ出てと思いながらも、消えてしまえない私のことを。

白氏文集。松の生えた門の内では、夜は明け方になるまで月が空を徘徊しているのを眺め、柏の茂る宮殿では、昼は日が傾くまで風が淋しく吹き渡る音を聞くばかりである。

［考察］『新楽府』陵園妾は、天子の住む陵墓の近くの宮中に幽閉された宮仕えの女性を憐れんだ詩。当歌は、幽閉されている宮中から脱出したいという願いが叶わない女性の悲しみを詠んだもの。

（玉越雄介）

孫思邈

571わかえつゝ三十いろえし薬もやちゝのこかねのなにのこるらん

列仙伝曰、留連スルコト三日、乃以軽紺金珠ヲ相贈。思邈堅ク辞シテ不レ受。乃命其ノ子ニ取竜宮ノ奇方三十首ヲ与思邈ニ曰、「此可ニ以助レ道ヲ者済レ世救レ人ヲ」。復以僕馬ヲ送思邈ニ帰。思邈以是ノ方ヲ歴ク試ルニ皆効シアリ。乃編テ入千金方ノ中ニ云々。

［出典］雪玉集、八一二六番。列子全伝、巻五。［異同］『新編国歌大観』『列子全伝』（慶応三年版本）ナシ。

［訳］　孫思邈

自らが手に入れて取り扱った三十の薬方を用いても、たくさんの黄金がどうして残るだろうか、いや世の人々のために使うのだから残らないだろう。

列仙伝によると、（思邈は）三日間そこに留まり（王は）軽紺と金珠を贈った。思邈は固辞して受けとらなかった。その子に命じて、竜宮の珍しい薬を三十取ってこさせて、思邈に与えて言うには、「この薬を用いて道を助ける者は、世の中を救済し人々を救うことができる」と。再び下僕と馬に送らせて思邈を帰した。思邈はこの薬をあらゆる人々に用いたところ、皆に薬効があった。そこで「千金方」の中に採用した云々。

［考察］典拠の「列仙伝」とは明代の漢籍『有象列仙全伝』をさし、前漢の劉向著『列仙伝』や晋の葛洪著『神仙伝』に代表される「仙伝もの」の一つ。孫思邈は『備急千金要方』『仙金翼方』等を著した唐代の医家。百家の説に通じ陰陽・医道を極め、のちに「薬王」と呼ばれた。典拠は思邈が竜王の子を助けたことで、龍宮の王から珍しい薬方を持ち帰ったという伝説を記す。当歌は、官職につかず貴重な薬をも広く人々のために用いた思邈を讃える歌。

（永田あや）

列子

572 碧空に吹たより待てふ仙人も風のおさまる世をやしるらん

列仙伝曰、列子ハ鄭人ナリ。名ハ禦寇。問ニ道ヲ於関尹子一、復師トスニ壺丘子ヲ一。九年ニシテ能ク御シテ風ニ而行。

［出典］碧玉集、一二六四番。列子全伝、巻一。［異同］『新編国歌大観』『列子全伝』（慶応三年版本）ナシ。

［訳］　列子

空に吹く風を待って飛ぶという仙人も、今は風が収まる平和な世であることを知っているのだろうか。

列仙伝によると、列子は鄭の人である。名は禦寇。関尹子に教えを請い、また壺丘子を師とした。修行して九年で、風に乗って飛べるようになった。

［考察］「列仙伝」については571番歌を参照。列子は本名列禦寇、春秋時代の思想家でその学は黄帝老子に基づく。当歌は、今は風も治まる平和な世の中だから、仙人が風を待っていても吹いてこないのにと詠んでいる。

（永田あや）

釣舟

573 わつかなるえをかくはしみよる魚は釣するふねもあはれとやみる

［出典］雪玉集、三六四五番。［異同］『新編国歌大観』ナシ。

［訳］　釣舟

少ししかない餌を美味しそうだと思って寄ってくる魚を、釣り舟も哀れだと思うだろうか。

［考察］当歌は、香ばしい餌につられて餌が少ないにもかかわらず寄っていってしまう魚に寄せ、釣りをする舟の哀れさを詠んだ歌である。典拠は次の574番歌、参照。

（梅田昌孝）

釣漁

574水のうへのえをかくはしみよる魚のこゝろも人もおなし世の中

呂氏春秋曰、善ク釣ル者ハ取ル魚ヲ於千仞ノ之下ニ餌香ケレハ也ナリ。

六韜曰、太公曰、「緡ツリイト微ニシテ餌明ナレハ小魚食レ之。緡調餌香ケレハ中魚食レ之ヲ。緡隆餌豊ナレハ大魚食レ之ヲ。夫レ魚ハ食ニ其ノ餌ヲ乃牽ニ於緡一。人ハ食ニ其ノ禄ヲ乃服ニ於君一。故ニ以レ餌取レ魚ヲ可レ殺。以レ禄取レ人ヲ人可レ竭」云云。

［出典］雪玉集、二三六六番。呂氏春秋、巻二、仲春紀、功名編。六韜、文師第一。

［異同］『新編国歌大観』『円機活法』（巻五、人品門、垂釣捕魚）『兵法全集　六韜』ナシ。『新編漢文選　呂氏春秋』「魚於千仞―魚乎十仞」。

［訳］　釣漁

この世間では、報酬が欲しくて君主に従う人の心は、水の上にある餌を美味しそうだと思って寄ってくる魚の心と同じなのだよ。

呂氏春秋によると、釣りの名人は魚を測れないほど深い所から釣り上げるが、これは使う餌が香ばしいからである。

六韜によると、太公望が言うには、「釣り糸が細くて餌がはっきりしていれば、小さな魚が引っ掛かる。糸が

よく調っていて、餌が香ばしければ、中くらいの魚がこれを食う。糸が太くて餌が豊富であれば、大きな魚が食う。いったい、魚はその餌を食わんとして釣り糸に引っ掛かる。それと同様に人はその禄を得ようとして、君主に服従する。それゆえ、魚は餌を使っておびき寄せて殺すべきである。また、人は禄でもって引きつけ、搾り取るべきである」云云。

［考察］当歌は香る餌に引き寄せられる魚のように、禄に引かれて君主に服従する世人を諷刺したもの。

（梅田昌孝）

575 柏 誰かしる釣のうてなのうへにても世には見えしの身をや置らん

後漢。厳子陵少与二光武一同一学ス。後光一武即レ位隠レ身ヲ不レ見。微シテ為二諫議大夫一不レ屈隠二迹ヲ於富春山一。垂レ釣、後一人因テ以名ッケテ為二厳一陵一瀬ト一。

［出典］柏玉集、一六七九番。後漢書、逸民列伝第七三。円機活法、巻五、宮室門、釣臺。

［異同］『新編国歌大観』『円機活法』ナシ。

［訳］　誰が（釣り人の身元を）知っているだろうか。釣台の上にいても、世間の人と会わないように心がけて身を置いているのだろう。

後漢書。厳子陵は若い頃、光武帝と共に学んだ。後に光武帝が即位すると身を隠した。（光武帝は厳子陵を）秘密裏に諫議大夫にしたが従わず、富春山に隠れた。釣りをして暮らしたので、後の人はその釣りをした所を厳陵瀬と名付けた。

［考察］出典は『後漢書』の抜き書きであり、異同が多く見られたため『円機活法』を参照した。当歌は、世の人に

まみえず釣りをして暮らす厳子陵を詠んだもの。

（梅田昌孝）

禁中

576老すてふ門も名にあれや君かへんちとせの数の百敷のうち

朗詠集。不老門前日月遅。

［出典］雪玉集、二三二〇番。和漢朗詠集、下、祝、七七四番。［異同］『新編国歌大観』『和漢朗詠集』ナシ。

［訳］　禁中

「不老」という名を持つ門のある宮中の中で、君子は千年もの月日を送るのであるなあ。

朗詠集。不老門のあたりでは、時はゆっくりと流れて、天子は老いを迎えることはないのだ。

［考察］「不老門」とは洛陽にあった漢代の宮門の名。当歌は実在したものに寄せることで祝意を増幅させた祝祷歌。

（山内彩香）

雑歌中

577えの本のもとの言の葉くちさらは更にさかへむ北のふちなみ

［出典］柏玉集、七七〇四番。［異同］『新編国歌大観』ナシ。

［訳］　雑歌の中

榎の本の明神の「今ぞ栄えん」という昔の言葉が朽ち果てていなければ、藤原北家はさらに栄えるであろう。

［考察］「北の藤波」は藤原北家の別称。北家は藤原不比等の第二子房前を祖とし、冬嗣、良房などが出た最も栄えた

家。典拠は578番歌、参照。

（山内彩香）

蕭寺

578かしこしないまそさかへむ言のはを神もそへたる寺そこの寺

新古今集、神祇部。ふたらくの南のきしに堂たてゝいまそさかへむ北の藤波

此歌は興福寺の南円堂つくりはしめ侍るとき、春日の榎の本の明神よみたまへりけるとなむ。

［出典］雪玉集、七六四三番。新古今集、巻一九、神祇、一八五四番。［異同］『新編国歌大観』『新編全集』ナシ。

［訳］　寺院

すばらしいことだなあ。「今からまさに栄えるであろう」という言葉を神も告げた寺が、この寺である。

新古今集、神祇部。補陀落の海とも見える猿沢の池の南の岸に堂を建てて、今からまさに栄えることであろう。藤原の北家は。

この歌は、（八一三年に藤原冬嗣が）興福寺の南円堂を作りはじめました時、春日の榎の本の明神がお詠みになった歌だということです。

［考察］蕭寺は寺の異称。南朝梁の武帝（蕭衍）が寺を造り、書の名人蕭子雲に命じて、門の額に自分の姓を書かせた故事による。

（山内彩香）